SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

サンティアゴ図像の変遷：間テクスト性と図像

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-05-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大原, 志麻, 田辺, 加恵, 井上, 幸孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00026593

サンティアゴ図像の変遷
—間テクスト性と図像—

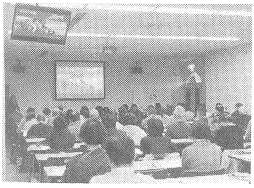
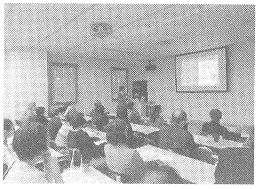
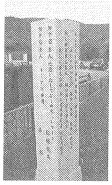
大原志麻
田辺加恵
井上幸孝

1．サンティアゴ巡礼に関する公開講座の実施報告

大原志麻

2018年11月３日土曜日の10時から16時まで、あざれあ大会議室を会場に、静岡大学公開講座「サンティアゴ巡礼を学ぶ・楽しむ～スペイン・フランス・メキシコのカミーノ～」を、本学の今野喜和人、花方寿行、大原志麻を中心とし、外部からは立命館大学の田辺加恵、専修大学の井上幸孝を招待し開催した。本講座はまず前半に、スペイン中世盛期におけるサンティアゴ（聖ヤコブ）崇敬最盛期から後期中世の衰退期、そして近世のメキシコにおけるサンティアゴ崇敬について、田辺加恵、大原志麻、井上幸孝が時代順に発表をした。

第一回は田辺が「スペイン中世盛期におけるサンティアゴ崇敬と巡礼路の発展」と題して、講座全体の基盤となる内容について解説した。聖書の記述における聖ヤコブを紹介し、なぜイベリア半島へ宣教し、聖ヤコブの遺骸が同地で「発見」され、崇敬の対象となったのかについての説明があった。そして中世の巡礼がいつから始まり、その旅の様子がどうなったのか、また巡礼者の増加で道や町がどのように変わったのかを現地調査を踏まえた多くの図像を用いながら説明された。

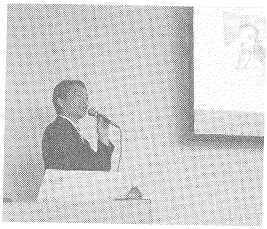
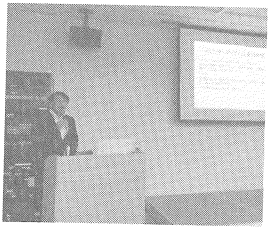
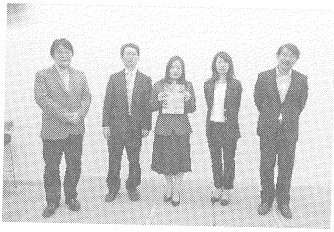
第二回の大原は、時代を引き継ぐかたちで、「後期中世におけるサンティアゴの衰退とラテンアメリカへの道」と題し、アストゥリアス＝レオン王権による庇護があったサンティアゴ崇敬が、なぜそしてどのように後期中世の王権によって軽視されていったのかについて、ボルゴーニャ朝とトラスタマラ朝の守護聖人サンティアゴと関連する王権儀礼を中心に衰退の推移を概観した。また近世初頭のサンティアゴ崇敬復興期を担ったとされるカトリック両王とサンティアゴ崇敬を新大陸にもたらしたとされるコルテスについて、その背景は宗教的なものではなく、貴族の権益にあるとし、復興についてもあくまで一時的なものであった点について講じた。

第三回の井上は「メキシコのサンティアゴ―先住民のキリスト教化と聖人崇拝―」というテーマでの発表の中で、まず「メキシコのサンティアゴの道」というサンティアゴにゆかりのあるサンティアゴ・デ・ケレタロといった都市及び首都メキシコ市へのルート上にある世界遺産間を結ぶ文化的・宗教的ツーリズムのプロジェクトについての説明があった。またメキシコ全32の行政区などに現存する526もある「サンティアゴ」の地名を挙げ、アステカ征服戦争におけるサンティアゴ出現譚についても紹介された。またメキシコにおけるサンティアゴ巡礼路への巡礼者数を挙げ、メキシコでの関心の高さにも言及した。

また中世・近世初頭と現代とを結ぶ研究蓄積のない難しい時代については「スペイン語圏文学におけるサンティアゴ」のタイトルで、静岡大学の花方寿行が引き受け、16世紀以降のサンティアゴ・デ・コンポステラの求心力の低下と「サンティアゴの遺骨」の喪失、宗教改革・対抗宗教改革の激化に伴う聖人信仰への逆風、黄金世紀のスペイン文学におけるサンティアゴ巡礼のプレゼンスの欠如といったサンティアゴ巡礼の冬の時代についての背景について説明をした。また、「理性の時代」である18世紀も「サンティアゴ巡礼」は文学や美術のテーマにするには古くなった観はあるが、同時代の矛盾する活動として現在みられるサンティアゴ大聖堂の建築物のほとんどがこの時期に建築または完成している点を挙げ、国際的な注目度が下がった時代においても、サンティアゴ信仰が地域的に存続していたことを指摘した。日本との比較を交えながらわかりやすい話で当日のアンケートでは一番人気であり、議論も盛り上った。

そして最後の講座については、1980年代に既にサンティアゴ・デ・コンポステラ巡礼路を旅し、2007年に『サン・ジャックへの道』、および2012年に『星の旅人たち』公開記念セミナーでサンティアゴ関連の文学・映画・巡礼体験記などについて講じた静岡大学の今野喜和人が「サンティアゴを巡るスピリチュア

ルブームと観光」というテーマで、現代の文学文化面からのサンティアゴ巡礼について担当した。20世紀までのサンティアゴ巡礼停滞期が、パオロ・コエーリョの小説『星の巡礼』(*O Diário de um Mago*、1987)の国際的なベストセラー化を画期に潮目が変わったことを指摘、また1990年以降の巡礼ブームへと至る背景として、宗教の世俗化、世界遺産登録、ウォーキング・トレッキング・ブームによる環境整備に加え、コンテンツ・ツーリズムといった観光行動の相互作用があることについて説明した。サンティアゴ巡礼に関する映画・文学作品を紹介が多くあり、また巡礼証明書についての具体的説明や日本での身近な文化的諸相を交えての説明のお陰で、来場者の満足度が非常に高いものとなった。当日公開講座をお引き受け頂いた先生方にはこの場を借りて謝意を申し上げたい。

公開講座には静岡県内及び首都圏の一般の方を中心に北海道から四国九州など遠方からも事前に131名の申し込みがあり、当日の来場者は124名と大盛況で、サンティアゴ巡礼への関心の高さを実感した。公開講座では多くの図像が紹介されたが、とても時間内に十分な図像を紹介し、それについて解説することはできなかった。以下では、田辺、井上、大原の担当講座を拡充するかたちで、サンティアゴがどの様に文字テクストや図像で描かれ、時代の推移や他地域への伝播によって変容したかについて論ずることとする。

田辺は、中世イベリア半島における聖ヤコブ図像について、「クラビホの戦い創作」の意図を念頭に、サンティアゴ大聖堂のタンパン「クラビホのタンパン」や関連の彫刻をとりあげ、12世紀の「聖ヤコブ誓約」の記述との図像との比較研究を行う。

井上は、公開講座の中で「海を渡ったサンティアゴ」として紹介した、スペイン、フィリピン、そしてとりわけメキシコにおけるサンティアゴ像の特徴を整理する。まず、講座中において紹介された、ロペス・デ・ゴマラやアコスタ

などのテクスト間の事実関係や奇跡的出現の描写についてなぜ異動が生じているのかについて考察する。その上で、メキシコに現存するサンティアゴ図像にどのような特徴が見られ、研究の現状においてどのような問題点があるのかを指摘する。

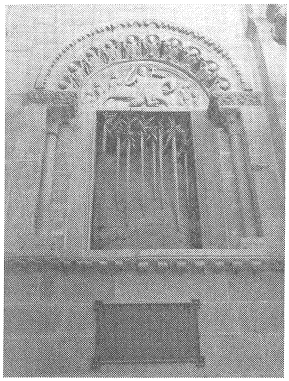
大原は、中世のレオン王国そしてカスティーリャ王国でどのようにサンティアゴの図像が形成されていったか、またどのような側面がラテンアメリカに伝わり変容したのかについて、クロニスタのテクストにおけるサンティアゴの表象を概観し、どのような図像に結びついていったかについて考察する。

2.「クラビホのタンパン」の再解釈

田辺加恵

2.1. はじめに

「クラビホのタンパンTímpano de Clavijo」(図1)と呼ばれる浮彫は、サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂南翼廊の薄暗い片隅にある。タンパン(ティンパヌム)とは、中世建築においては扉口上部にある楣(まぐさ)とアーチに囲まれた半円形の部分のことであり、「クラビホのタンパン」も当初は別の場所にあった扉口の上部を飾っていたと思われるが、後世に移築され、現在は壁の装飾の一部となっているにすぎない。大聖堂は現在大修理の時期に入っていて、以前のように西側正面の「栄光の門」(図8)からの出入りが自由にできなく



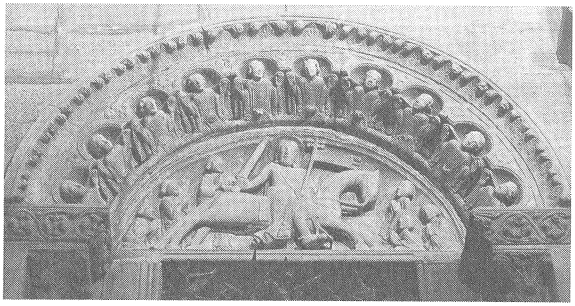
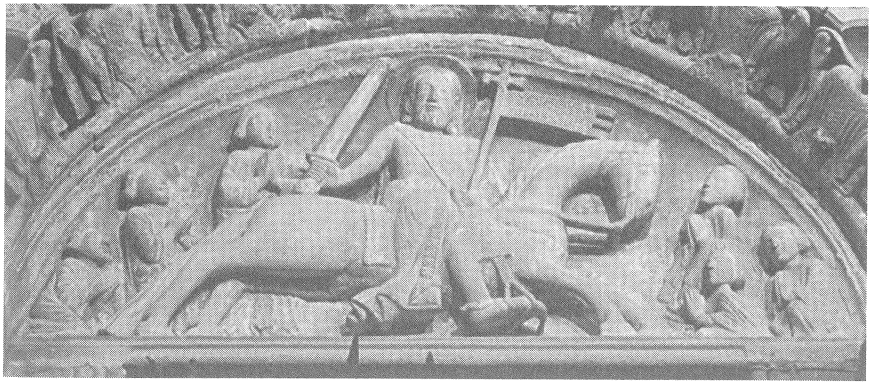


図1 クラビホのタンパン
(2018年9月筆者撮影、右上と下は聖ヤコブ像部分の拡大)



なったため、「クラビホのタンパン」に近い南側の「プラテリアス門（銀細工師の門）」から聖堂内に入る人が最も多いのだが、この半円形の区画に施された聖ヤコブの騎馬像に注意を向ける人はほとんどいない。しかし、下記に述べるような意味で聖ヤコブのイコノグラフィー研究においてはきわめて重要な彫刻である。

聖ヤコブの図像パターンとしては時代的に古いものから順に、①使徒姿、②巡礼者姿、③騎馬姿（戦士姿）の主に３種の形態があり、中世以降このうちのいずれか、あるいは複合された形で表されてきた。13世紀半ば頃の彫刻である「クラビホのタンパン」は、③のグループに属するもののうち現存する最古の例の一つである。

小論では、まずこの聖ヤコブの３形態について概説し、続いて「クラビホのタンパン」の意匠や配置場所を検証したあと、現代に生きる我々にとって過去に置き忘れられたようなこの彫刻についていかなる再解釈が可能かを考える。

２．２．聖ヤコブのイコノグラフィー

２．２．１．使徒姿の聖ヤコブ

聖ヤコブ（ラテン語：Iacobus、スペイン語：Santiago）はキリストの十二使徒のひとりであるから、当然ではあるが、最初に図像として表されたのは使徒の姿であった。リエバナの修道士ベアトゥス（730？－800？年）が著した『黙示録注解』のジローナ写本（975年）中の挿絵（f. 52v-53r）が現存するものの中で最古であるとされている[1]（図２[2]）。ここに見られる12人の人物は、いずれも裸足でチュニカとトーガを身にまとった使徒の伝統的な図像表現で描かれており、個々の特徴から誰が誰かを判別するのは難しいが、それぞれの人物の頭上に記されている名前と伝道地によって、ようやく左から４番目の人物が聖ヤコブであるとわかる。*Iacobus Spania*と記されたこの人物が、髭もなく、彼の弟で十二使徒の中でももっとも年少であったという聖ヨハネよりも若々しく描かれているのは、使徒の中で最初に殉教した聖人だからであろうか。

ところで、Spaniaとはイベリア半島の古称ヒスパニアのことである。他の機

---

[1] Jesús Fraga (2004/07/18), "Un códice del siglo X guarda el retrato pintado más antiguo de Santiago", *La Voz de Galicia,*
URL: https://www.lavozdegalicia.es/amp/noticia/television/2004/07/18/codice-siglo-x-guarda-retrato-pintado-antiguo-santiago/0003_2866349.htm#（参照日：2019年２月２日）

[2] https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Beato_de_Gerona._F%C2%BA_052v-53r.jpg（参照日：2019年２月４日）

図2
ベアトゥス
『黙示録注解』の
ジローナ写本

右図の左から4人目が聖ヤコブ、左図はその拡大

会に述べた[3]のでここでは詳述しないが、聖書に記述はないものの、十二使徒のうち、イベリア半島に伝道を行ったのは聖ヤコブであるとする説が7世紀には西欧世界に敷衍していた。9世紀に聖ヤコブの遺骸が現在のサンティアゴ・デ・コンポステラで「発見」され、そこに聖堂が建設されると、使徒の墓所に参詣する巡礼者が半島内外から多く参集し、聖ヤコブは広く人びとの崇敬を集めるようになった。

サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂の「栄光の門」(図8、1188年完成)の右側柱に立つ聖ヤコブの彫像(図3[4])も、チュニカ、裸足、右手に聖典という点では、ジローナ写本の挿絵とほぼ同様である。異なるのは、こちらの方は髭をたくわえ、柄がT(ギリシャ文字のタウ)の形状になった杖[5]に左手を添えている点である。「栄光の門」の中心柱に坐す聖ヤコブ像(図4[6])もやはり左

---

[3] 田辺加恵「『マタモロス聖ヤコブ』像の形成とその戦略的利用」『スペイン史研究』30号、2016年、22〜23頁。

[4] Ramón Yzquierdo Perrín, *El maestro Mateo y el Pórtico de la Gloria en la Catedral de Santiago*, León, 2010, p. 69より転載。

[5] Julio Peradejordi, *Símbolos fundamentales del Camino de Santiago*, Barcelona, 2004, p. 66によると、この形状の杖は再生のシンボルである。一方、Manuel Jesús Precedo Lafuente, *Santiago el Mayor y Compostela. Un apóstol, una ciudad, unos caminos*, Madrid, 1998, p. 97によれば、この杖を持つ聖ヤコブ像は本文2. 2. 2. で述べる巡礼者姿への図像形式上の発展の兆しを示すものであると考える研究者がいる。また同じ箇所において、このタウ型の杖は 聖ヤコブが護符代わりにヘルモゲネス(5〜6世紀に書かれた『聖ヤコブの受難』に登場する魔術師)に授けた杖(この話は13世紀のヤコブス・デ・ウォラギネ著『黄金伝説』にも採用された)の記憶を再現している可能性も示唆されている。

[6] Manuel Castiñeiras González, "Un nuevo testimonio de la iconografía jacobea los relieves pintados de Santiago de Turégano (Segovia) y su relación con el altar mayor de la Catedral de Santiago", *Ad limina: revista de investigación del Camino de Santiago y las peregrinaciones*, N°. 3, 2012, p. 91より転載。

左から

図3　サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂「栄光の門」
側柱の聖ヤコブ像（左）と聖ヨハネ像

図4　サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂「栄光の門」
中心柱の聖ヤコブ像

手をこの形状の杖に添えており、やがてこのタウ型の杖はサンティアゴ大司教のシンボルともなった[7]。

2.2.2. 巡礼者姿の聖ヤコブ

このタイプの像は、外套、つば付き帽子、ひょうたんの付いた杖、頭陀袋といった当時の巡礼者姿をとっているのが特徴である。帽子や頭陀袋にサンティアゴ巡礼のシンボルであるホタテ貝がついている場合もある[8]。巡礼者がめざす墓所に眠るその張本人であり、巡礼者の守護者でもある聖ヤコブ自身が巡礼者の姿をしているのは興味深い。サンティアゴ巡礼が盛んになるにつれ、このタイプの聖ヤコブ像がイベリア半島各地で多く作られるようになった。

この型でもっとも古い例は、12世紀前半に建立されたサンタ・マルタ・デ・テラ教会（サモラ県）扉口の左脇に立つ像（図5[9]）に見ることができる。サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂の主祭壇にある聖ヤコブ坐像（図6[10]）は

---

[7] Ibid., p. 84 y p. 93. Ramón Yzquierdo Perrín, "Iconografía de Apóstol Santiago en la Catedral compostelana", *Iacobus*, catálogo de exposición, Santiago de Compostela, 2013, p. 22によると、歴代のサンティアゴ・デ・コンポステラ大司教は中世末までこのタウ型の杖を実際に使っていたという。

[8] 巡礼者の服装については、ピエール・バレ／ジャン・ノエル・ギュルガン（五十嵐ミドリ訳）『巡礼の道 星の道―コンポステラへ旅する人びと―』平凡社、1986年、43～49頁や、関哲行『スペイン巡礼史―「地の果ての聖地」を巡る』講談社現代新書、2006年、131～134頁などを参照。ホタテ貝がサンティアゴ巡礼のシンボルとなった理由については、これまでさまざまに説明されてきた。「女性の生殖機能と豊穣、巡礼者の復活と再生のシンボル」「異教的習俗との融合」（以上、関、同上書、133頁）という説の他、「4世紀には、この貝殻はすでに巡礼一般を象徴していた」という説もある（バレ／ギュルガン、前掲書、48頁）。

[9] https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Santa_Marta_de_Tera- Santiago01.jpg?uselang=ja（参照日：2019年2月4日）

[10] Y. Perrín, *op. cit.*, 2010, p. 159より転載。

左から

図５　サンタ・マルタ・デ・テラ教会の聖ヤコブ像

図６　サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂主祭壇の聖ヤコブ像

13世紀初頭に作られたもので、これも巡礼者の格好をしているが、ひょうたんの付いた杖や銀製のマントは17世紀末～18世紀初頭に付加されたものである（さらにマントは2004年に新調された）。

２．２．３．騎馬姿の聖ヤコブ

白馬にまたがった聖ヤコブが片手に剣、片手に旗を掲げた図像。先述した通り、このタイプでもっとも古いものの一つは冒頭に挙げた「クラビホのタンパン」（図１）である。ただ、このタイプの彫刻や絵画はほぼ17世紀以降に作成されたものである[11]。

騎馬姿のこの像は「キリストの騎士*miles Christi*」としての聖ヤコブの表象であり、これに関する古い記述は『シロス年代記』（12世紀初頭）中のフェルナンド１世によるコインブラ征服（1064年）について書かれた箇所にみることができる。それによれば、あるとき、ギリシャ人巡礼者がサンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂で祈っていると、聖ヤコブが現れ、前日に「聖ヤコブは騎士ではない」と言った彼のその発言を否定した。そして、続いて出現した輝く馬にまたがると、王のコインブラ征服を予言したのであった[12]。このエピソードは、『聖ヤコブの書』（12世紀半ば）[13]の「奇蹟の書」や『世界年代記』（13世紀前

[11] Denise Péricard-Méa, "Santiago, del apóstol al Matamoros", SaintJacquesInfo [En ligne], Saint Jacques un et multiple, Le saint politique, mis à jour le: 22/02/2016,
URL: http : //lodel. irevues. inist. fr/saintjacquesinfo/index.php?id=1333（参照日：2019年２月９日）

[12] *Historia Silense*, ed. Justo Pérez de Urbel y Atilano González Ruiz-Zorilla, Madrid, 1959, pp. 191-193.

[13]『カリクストゥス本』とも呼ばれる。５巻から成り、２巻目が「奇蹟の書」である。渡邊昌美『巡礼の道―西南ヨーロッパの歴史景観』中公新書、1980年、６～12頁参照。

半)、『ヒスパニア事蹟史』(同)、『スペイン史』(13世紀後半) などの年代記にも採用され、広く知られるようになった。

時代が下ると、聖ヤコブ像の足元付近に馬の脚に踏みつけられ、聖ヤコブに斬りつけられるイスラーム教徒の姿が置かれるようになる。この像は「マタモロスMatamoros[14]」と呼ばれる。おそらくこのタイプで最も有名なのは、サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂北翼廊にある像(図7)であろう。しかし、近年になって、ポリティカル・コレクトネスの観点から、イスラーム教徒の部分は花で隠されるようになった[15]。

図7 サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂のマタモロス像
(2018年9月筆者撮影)

このように聖ヤコブの3類型を簡単に見てきたが、最初に挙げた使徒・伝道者としての型から2番目の巡礼者の型への転身が完了するのは、14世紀頃である[16]。これはサンティアゴ巡礼の最盛期が12〜13世紀とされることを裏付け、この頃に聖ヤコブ=巡礼の保護者というイメージが定着したことも物語っていると言えよう。

聖ヤコブは単にイベリア半島へキリスト教をもたらした使徒・伝道者というだけでなく、悩みを聞き、病気やけがから救い、犯した罪を赦免するという巡礼者の願いを叶え、さらには巡礼の路上におけるあらゆる艱難辛苦から守ってくださるありがたい聖人へと完全に昇華した。だがこの巡礼者姿の型も17世紀

---

[14] スペイン語のmatar(殺す)とmoro(イスラーム教徒)を組み合わせた語。

[15] E. Otero (2006/6/16), "Flores para esconder a Matamoros", *El Correo Gallego*, URL: https://www.elcorreogallego.es/santiago/ecg/flores-esconder-matamoros/idEdicion-2006-06-16/idNoticia-55744(参照日:2019年2月11日)

[16] 渡邊、前掲書、35頁。

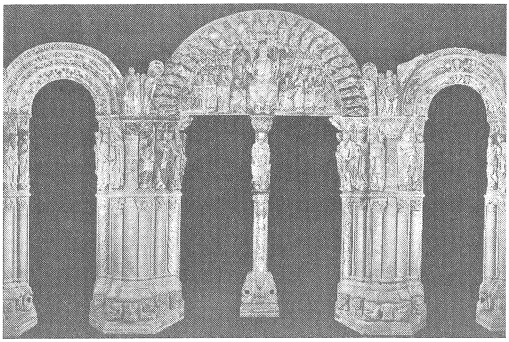


図８ サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂の「栄光の門」

には見られなくなる[17]。代わってこの時期から多くモチーフとして使用されるようになるのが、３番目の騎馬（戦士）姿の型であった。

２．３．「クラビホのタンパン」について

「クラビホのタンパン」は、底辺の直径が1.72m、床面から6.04mの高さに位置する[18]。製作年代は不明である。1220－1250年頃、「栄光の門」の作者マテオと関係のある工房で作られたとする説が主である[19]。

２．３．１．「クラビホのタンパン」の構成

半円の中心部には、馬にまたがり、上半身を正面に向けた聖ヤコブが大きく刻まれている。肘まであるぴったりとした衣服を身に着け、その長い裾は彼の足元で風を受けて翻り、腰に巻いたベルトには連続したホタテ貝の模様が浮かび上がる。聖人は右手で剣を掲げ、左手では手綱を引きながらも、突端に十字架が付いた「SCS ⋮ IACOB' ⋮ / APLUS ⋮ XPI」（SANCTUS IACOBUS

---

[17] 同上書、36頁。

[18] *Enciclopedia Universal Ilustrada Europeo-Americana*, Madrid, 1912, tomo XIII, p. 749.

[19] Ángel Sicart Giménez, "La iconografía de Santiago ecuestre en la Edad Media", *Compostellanum*, vol. XVII, 1982, p. 28; Ramón Yzquierdo Peiró, "*Misit me dominus*. Santiago el Mayor en las colecciones artísticas de la catedral compostelana", *Ad Limina*, vol. 8, No. 8, 2017, p. 97; José Manuel García Iglesias, *Secretos de Catedral. A basílica de Santiago de Compostela a través de seus tempos e espazos*, Santiago de Compostela, 2014, p. 68.
一方、L. フェレイロのように、11世紀の作と考える研究者もいる。Antonio López Ferreiro, *Historia de la Santa A. M. Iglesia de Santiago de Compostela*, tomo II, Santiago de Compostela, 1899, pp. 104-110. P. ラフエンテも11世紀の作としながらも、クラビホの戦い自体が13世紀［ママ］の創作であることを指摘する研究者によって、タンパンの創作年代については議論されてきたと述べている。P. Lafuente, *op. cit.*, p. 98.

APOSTOLUS CHRISTI＝キリストの使徒聖ヤコブ）と書かれた旗を支え持つ。肩まで伸びた髪、口髭・顎鬚をたくわえた穏やかな顔は、「栄光の門」のキリストのものともどことなく似て、大きなその目は正面を見据えているようにも、眼下の観察者を見下ろしているようにも見える。

G. イグレシアスは、タンパン中心に剣と旗を掲げる聖ヤコブ像、半円外縁に居並ぶ10人の天使を持つ「クラビホのタンパン」と、聖痕のある両掌を見せて中心の玉座に座るキリスト、半円外縁を飾る24人の長老を持つ「栄光の門」（図8[20]）との相関関係を指摘する[21]。「栄光の門」のタンパンには、『新約聖書』の「ヨハネの黙示録」第4章2～7節にある天上の礼拝に関する記述が忠実に表現されている[22]。同9～11節には、「玉座に座っておられ、世々限りなく生きておられる方に、これらの生き物（筆者注：玉座の周辺にいる4つの生き物のこと）が、栄光と誉れをたたえて感謝をささげると、24人の長老は、玉座に着いておられる方の前にひれ伏して、世々限りなく生きておられる方を礼拝し…（以下略）」とある。「クラビホのタンパン」の作者は、聖ヤコブを玉座にあるにふさわしき人物として、いわばキリストと同一視し、王権・神権の象徴である馬[23]に聖ヤコブを座らせることで、悪と闇に打ち勝つ勝利者として表現したのであろうか。さすれば、「クラビホのタンパン」で表現されている世界も、「栄光の門」と同様、中心にある人物の栄光と誉れへの賛美であったとみることができる。

「クラビホのタンパン」では、4人の生き物の代わりに、聖ヤコブの左右にそれぞれ3人ずつ、計6人の人物が聖ヤコブへ祈りを捧げている。これらの人物は誰なのだろうか。

2.3.2. クラビホと乙女たち

それを解く前に、「クラビホ」とは何を指すかを説明しておきたい。「聖ヤコブ

---

[20] Manuel Castiñeiras González, "El Pórtico de la Gloria: la más hermosa piedra de la Catedral", *Revista Catedral de Santiago*, No. 1, 2018, p. 38より転載。

[21] José Manuel García Iglesias, "La devoción real a Santiago Zebedeo en la catedral de Compostela: algunas representaciones medievales". *Mundos medievales: espacios, sociedades y poder: homenaje al profesor José Ángel García de Cortázar y Ruiz de Aguirre*, vol. 1, 2012, pp. 156-157.

[22] Y. Perrín, *op. cit.*, 2010, p. 100.「ヨハネの黙示録」の該当部分には、「玉座の周りに24の座があって、それらの座の上には白い衣を着て、頭に金の冠をかぶった24人の長老が座っていた。玉座の中央とその周りに4つの生き物がいた」（新共同訳、一部省略）とある。

[23] 田辺、前掲論文、23頁。

誓約」[24]（諸説あるが、現在では12世紀半ばに作成されたというのが定説となっている）によれば、アストゥリアス王ラミロ１世（在位842－850年）の治世にイスラーム教徒との戦闘が行われ、数的に圧倒的不利な情勢の中、白馬に乗った聖ヤコブの出現によってラミロ１世の軍隊は救われ、クラビホで大勝利を収めたという。しかし、この戦いも、そして「聖ヤコブ誓約」自体もサンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂参事会員ペドロ・マルシオの創作というのが現在では定説となっている。また同書末尾にはラミロ１世が聖ヤコブへの感謝の気持ちとして、未来永劫にわたり、半島全土の人民にサンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂への寄進を課したという記述があることから、教会の収入増を目的として作成されたものと考えられている。その後、この文書は『世界年代記』、『ヒスパニア事蹟史』、『スペイン史』に組み込まれ、後世に伝達されるようになる。「クラビホのタンパン」はこの話を想起させることから、そのように呼ばれるようになった。

「聖ヤコブ誓約」の冒頭によれば、クラビホの戦いは、先代の王たちが平和と引き換えにイスラーム教徒に対して行っていた「唾棄すべき貢納」[25]、すなわち、貴族の乙女50名、平民の乙女50名から成る100名の乙女の引き渡しをラミロ１世が拒否したことに端を発するという。そこで、従来、「クラビホのタンパン」の左右に位置する６人の人物は、聖ヤコブの加勢により貢納の対象となるのを免れた、あるいはすでにそうなっていた乙女たちを表していると考えられてきた。V.-A. カストロやL. フェレイロは人物の服装に着目し、左側の３人は袖口の狭いチュニカを身に着け、右側の３人はゆったりとドレープのある衣服を身に着けていることから、左が平民の娘たち、右が高い身分の娘たちであると解釈した[26]。他方、S. ヒメネスは、その可能性を留保しつつも、６人の人物の髪型や衣服からはそれが女性であるとは断定できないとして、彼（女）らがクラビホの戦場に現れ、勝利をもたらしてくれた聖ヤコブに感謝の祈りを捧げるキリスト教徒たちである可能性も提示している[27]。他にも巡礼者だとする説[28]もあるが、チュニカや広袖の外套という兵士・巡礼者らしからぬ身なりや、左右の人物で衣装を違えて表現していることから、乙女たちとする説がもっとも説得力があ

---

[24] 同論文、19～20頁。
[25] 同論文、19頁。
[26] José Villa-Amil y Castro, *Descripción histórico-artístico-arqueológica de la Catedral de Santiago*, Lugo, 1866, pp. 80-81; L. Ferreiro, *op. cit.*, pp. 109-110.
[27] S. Giménez, op. cit., pp. 29-30.
[28] Péricard-Mea, op. cit.

るように思われる。

2.3.3.「クラビホのタンパン」の配置場所

サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂は1211年に聖別されて以降も、数世紀にわたり、特に15～18世紀の間に繰り返し増改築が行われて現在の姿となった。「クラビホのタンパン」はもともと中世の回廊[29]への入り口上部にあったが、回廊が15世紀に焼失、16世紀に再建されたのに伴い、現在の場所に移されたと考えられている[30]。

現在「アサバチェリア門（黒石細工師の門）」がある大聖堂北側面には、かつて「フランス門」と呼ばれる門があり、大聖堂に到着した巡礼者たちは「フランス門」から入って南門から出るというのが常であった。『聖ヤコブの書』第5巻の「巡礼案内記」にも「我らフランス人は、使徒の聖堂に入ろうとするとき、北側の門へ向かう」と記されている[31]。同書によれば、この門には2つの扉口があり、その中心柱の上には、祝福の印として右手を挙げ、左手で聖典を持つキリストの像（現在は「プラテリアス門」に移築されている）、その周囲には4人の福音書記者たちの彫刻があったという。そしてその右側には、天国でアダムとイブの罪を糾弾するキリスト、左側には彼らを天国から追放するキリストの彫刻があった[32]。他にも、カオス・悪を象徴する長い髪の女や、好色の象徴である蛇もしくは強欲の象徴であるカエルを持つ女の彫刻があるなど、北門の主題は罪であった[33]。一方、どくろを両腕に抱く女（一説によれば、このどくろは夫に斬られた愛人の首で、日に二度これに接吻をするよう義務づけられたという）などの彫刻がある南門の主題は贖罪である[34]。つまり、北門から大聖堂内部へ、主祭壇を経由して南門へという移動は、罪の浄化・贖いを意味した。

---

[29] 『コンポステラ史』（12世紀前半）には、「巡礼者たちは、回廊はどこかと尋ねたり、それを探して教会の周囲をまわったりしていた。そしてそれが存在しないのを知ると、あからさまに教会の聖職者や管理者たちを非難した」ため、初代大司教ディエゴ・ヘルミレス（位 1120－1140年）は回廊を建築したとある。*Historia Compostelana,* ed. Emma Falque Rey, Madrid, 1994, pp. 493-495.

[30] V.-A. Castro, *op. cit.*, p. 82; S. Giménez, op. cit., p. 28; Francisco Javier Ocaña Eiroa, "El crucero de la Catedral de Santiago. Mutilaciones y transformaciones", *Abrente,* No. 40-41, 2008-2009, p. 57; G. Iglesias, *op. cit.,* 2014, p. 68; Y. Peiró, op. cit., p. 97.

[31] *Códice Calixtino,* trad. A. Morarejo/C. Torres/J. Feo, Santiago de Compostela, 2016, p. 67.「アサバチェリア門」に関しては、注35参照。

[32] *Ibid.*, p. 69.

[33] Marta Cendón Fernández, "La meta es Santiago: arquitectura e iconografía de la catedral en tiempos de Gelmírez", *Los caminos a Santiago en la Edad Media: imágenes y leyendas jacobeas en territorio hispánico (siglos IX a XIII),* ed., Inés Monteira Arias, Santiago de Compostela, 2018, pp. 122-134.

[34] Ibid., pp. 134-145; *Códice Calixtino,* pp. 71-72.

そして祈りと瞑想の場所である回廊への入り口は、南翼廊の脇にある。

主祭壇での祈りを済ませた巡礼者たちが回廊の方へ進んでいくと、そこに「クラビホのタンパン」があった。彼らの目には、彫刻の中の膝まずく人物たちが、邪悪に打ち勝つ勝利者、聖ヤコブに罪の赦しのとりなしと庇護を願う、自分の姿と重なって見えたにちがいない。

現在、北側の翼廊には、先にも触れたホセ・ガンビーノ（1719－1775）作のマタモロス像が置かれている（図７）[35]。有名な彫刻であるため、これを見ようと足を止める人も少なくない。聖ヤコブの足元は花で覆われているが、苦しみもだえるイスラーム教徒の像が垣間見える。「マタモロス」の図像および用語は、近代・現代を通じてしばしば応用が加えられ、「他者」の排除や国民精神の高揚を行う目的で宗教的・政治的に用いられてきた[36]。この像だけに及ばず、一般に「マタモロス」像は見る者に一種の緊張感を与える。これに対し、「クラビホのタンパン」に刻まれているのは祈りの場面、聖人との対話や内省を行う静の場である。そこに主義主張の押しつけや異なる思想を持つ者への攻撃は感じられない。

かつて北門にあった罪をテーマとするいくつかの彫刻は、18世紀に南側の「プラテリアス門」へ移築された。そこが現在では主たる大聖堂への入り口となっているのは偶然であろうか。敢えて探そうと思わなければなかなか目に留まらない「ただの装飾」となってしまった「クラビホのタンパン」には、この時代において自省と観想、畏敬と感謝が軽んじられていることを再認識させられる。

２．４．むすびにかえて

14世紀の史料である『聖ヤコブの書』「サラマンカ写本」（f. 120r）および『トゥンボB』（f. 2v）には、それぞれ聖ヤコブの騎馬像の挿絵がある（図９、図10[37]）。衣服や細部に相違はあるものの、右手に剣、左手に旗という聖ヤコブのスタイルは「クラビホのタンパン」と同様である。この２つでは馬も非常に似通って

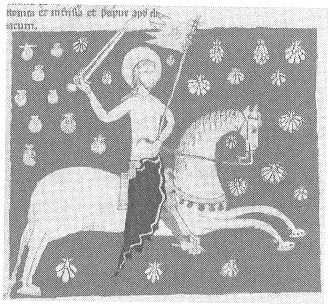
---

[35] 1750年前半頃にアサバチェという黒い石を細工する職人たちの依頼に応じて作成された。その経緯から、「アサバチェリア門」の近く、北翼廊の壁龕の中に納められている。

[36] Mataindios（インディオ殺し）、Matajudíos（ユダヤ教徒殺し）、Matarrojos（アカ殺し）など。Javier Domínguez García, *Memorias del futuro: ideología y ficción en el símbolo de Santiago Apóstol, Iberoamericana*, Madrid, 2008, pp. 118-121; Péricard-Mea, op. cit.

[37] それぞれ、Fernando Villaseñor Sebastían, "Iconografía del *Liber Sancti Jacobi* de la biblioteca histórica de la Universidad de Salamanca (MS. 2631): entre la tradición del *Jacobus* y la proyección posterior", *Ad Limina*, Vol. 3, No. 3, 2012のp. 192、p. 209より転載。

いて、後ろ脚で地面を蹴り上げ、前足を揃えて前方へ伸ばすさまは、馬が疾駆しているところを描写しているようだ。旗も正面からの風を受けて後ろに向かってなびいており、勢いが感じられる。一方、「クラビホのタンパン」では馬の両足は地についていて、旗も進行方向に向かってはためいている。まるで、天使たちが高らかに歌声を響かせる中、祈りを捧げる人びとの真ん中へ、今まさに聖ヤコブが馬に乗ってふわりと舞い降りたかのような、あるいは彼らの祈りに耳を傾けるためにつと立ち止まったかのようにも見える。



左から

図9『聖ヤコブの書』サラマンカ写本

図10『トゥンボB』

「クラビホのタンパン」がいかなる意図で作られたのか、聖ヤコブの両隣の人物は誰なのか、具体的にどの扉口を飾っていたのか、本当のところはわからない。巡礼者の中でどれだけの人がクラビホの戦いについて知っていて、彫刻を目にしたときそれを想起したかも不明である。12〜13世紀のサンティアゴ・デ・コンポステラ教会は、トレドやブラガなど他の大司教座と優位をめぐって対立していたから、「クラビホのタンパン」はヒスパニアの守護聖人としての聖ヤコブの立場を主張するための道具の一つとして作られたものであったのかもしれない。それはどうあれ、この彫刻を観る者は確かに聖ヤコブに畏怖を感じ、願いを聞き入れてくれるという期待、願いが叶えられたことに対する感謝を抱いたであろう。ロマネスク美術の碩学、エミール・マールはタンパンについて次のように述べている。「人びとの視線はまずそこに向かう。タンパンは信者を瞑想に誘い、日々の低次な想念から引き離し、聖所に入る心の準備を整えさせる。その扉口を通る前に、信者はすでに別世界の空気を吸っているのである」[38]。「ク

[38] エミール・マール『ロマネスクの図像学（下）』（田中仁彦／池田健二／磯見辰典／成瀬駒男／細田直孝訳）、国書刊行会、1996年、223頁。

ラビホのタンパン」は扉口から引きはがされ、もはやその下を通過する者はいない。しかし人びとを瞑想に誘う役割は、まだ完全に終えてはいないように思われる。

3．メキシコにおける聖ヤコブ像の定着過程の問題点
—間テクスト性と図像から—

井上幸孝

3．1　メキシコの聖ヤコブ像の研究に関する問題点

ヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）における聖ヤコブ信仰は、コルテスによる征服戦争の際に奇跡的に出現した聖ヤコブから始まるとして論じられるのが一般的である。だが、このような単純な見方にはいくつかの問題点がある。ヌエバ・エスパーニャにおいて聖ヤコブのイメージや信仰が伝播した経緯は、上記のような解釈よりもはるかに複雑で、複数の導入・定着の経緯があったものと想定される。そこで、はじめに現時点で考えられる主要な３つの問題点に言及しておく。

まず、最初の問題点として、聖ヤコブが出現したとされる時と場所は多岐にわたることが挙げられる。コルテスによるメシコ征服（アステカ王国の征服）の経緯だけでも複数の場所での出現が語られている。さらに、1521年のテノチティトラン陥落後、ヌエバ・エスパーニャ副王領が設置され、この副王領に含まれる領土が拡大していく長い歴史的過程では、様々な場所で聖ヤコブ出現の話がいくつも伝えられている[1]。この点については、扱う範囲が極めて広範であるのに加え、膨大な量の史料が存在するテーマであるため、今後の研究で順次進めていくこととする。

次に、聖ヤコブ出現に焦点を当てようとすればするほど、個別の出現場所やその姿の描写に注目が行きがちである。しかし、それらを体系的に比較して論じた研究は存在しない。現実には様々な史料—とりわけクロニカ類—の中に様々な方法で聖ヤコブ出現の話は記述されているが、自身の目撃談を記している場合もあれば他の史料を参照した上で論述している場合もある。また、特定の場

---

[1] メキシコ市（旧テノチティトラン）から南方のオアハカや中米方面、西方のミチョアカンやハリスコ方面は1520年代から遠征や征服の活動がなされた。また北方へは16世紀後半のチチメカ戦争を経て現在のメキシコ北部、さらにはアメリカ合衆国南西部へと拡大していったが、アルタ・カリフォルニア（現アメリカ合衆国カリフォルニア州）のように、18世紀後半以降ようやくスペイン支配が実質的に定着した地域もあった。カルダイヤックは、16世紀ヌエバ・エスパーニャにおいて、1524年（グアテマラ）、1530年（トナラ近郊）、1531年（ケレタロ近郊）、1541年（グアダラハラ）、1541年（ミシュトン戦争）の出現の奇跡を挙げている。Cardaillac, Louis, *Santiago apóstol, El Santo de los dos mundos,* Zapopan, El Colegio de Jalisco, 2002, pp. 128-149, 158.

所に限定して述べている記述もあれば、より包括的にアメリカ大陸の征服における聖ヤコブの出現や加護に言及している史料もある。

3つ目として、聖ヤコブの図像がどのように導入されたかについて、ほとんど何も明らかにされていない点が指摘される。部分的に図像を扱った研究も存在するものの、どのような経緯で普及したかについては今後の体系的な研究が待たれる。ひとまず想定しておく必要があると思われるのは、史料の記述と実際の図像が一致するとは限らない可能性である。ヌエバ・エスパーニャに導入された聖ヤコブ像には、当然のことながら、スペインからもたらされたであろう中世以来の聖ヤコブ像も含まれれば、既に過去の出来事となった征服時の聖ヤコブ像が16世紀後半以降に想像力とともに再現されたケースもあったと思われる。

本節では、上記の問題点のうち、最後の2つに関して今後の研究に役立つと思われるいくつか事象を見ることにしたい。まず、2つ目について、クロニカ間の記述の質的な違いの事例を簡潔に扱う。その上で、これまでに収集した図像を紹介しつつ、3つ目の問題を考えるうえで参考になると思われるいくつかの指摘を行いたい。

3.2 クロニカの記述

従来の研究では、どの史料—とりわけクロニカ類—の記述に、いつどこで聖ヤコブが出現したという記録があるかに注目が集まってきた[2]。個別の事例に関する研究もほとんど存在しない現状では、膨大な史料群から聖ヤコブ出現に関わる記述を見つけ出すという作業は重要である。しかし、その記述内容を歴史的事実としてすべて信じることが危険なのもまた確かであろう。

コルテス率いる征服戦争における最初の聖ヤコブ出現は、現タバスコ州のセントラ（もしくはシントラ）での戦いの際であった。この出現に関しては、複数のクロニスタが言及してはいるものの、最初の具体的なまとまった記述が登場するのは、征服から約30年を経てロペス・デ・ゴマラが出版した『インディアス全史』においてである[3]。同書には、次のように記述されている。

---

[2] メキシコおよびその他スペイン領アメリカとなった諸地域での出現譚とその史料については、カルダイヤックの研究が詳しい。Cardaillac, *op. cit.*, pp. 128-158.

[3] 『インディアス全史』は1552年にサラゴサで最初に出版され、この第2巻が「メキシコの征服」と題されている。同書は、初版の翌年にはインディアスへの持ち出し、1556年には出版そのものが禁じられたが、スペイン植民地でも広く読まれることとなった。

「[コルテスに] 彼らは馬に乗った者の行いを見たと告げ、それは仲間だったのかと尋ねた。仲間は誰も先に来ることはできなかったから仲間ではないとコルテスが答えたので、彼らはスペインの守護聖人である使徒聖ヤコブだったのだと思った。[…] 上述の通り、灰色で斑のある馬に乗った者が彼らに味方してインディオと戦うのを三度見たと皆が言った。それは我らが守護聖人である聖ヤコブだった。フェルナンド・コルテスは、彼の特別な守護者である聖ペトロであって欲しかった。とはいえ、そのいずれの聖者であったにせよ、奇跡が起こり、実際に出現したのである。というのも、スペイン人がそれを目撃したのみならず、インディオたちもまたそれに気づいたからだ。この話は捕虜になった連中から明らかになったものである。」[4]

興味深いのは、征服者コルテスの『報告書簡』には聖ヤコブ出現への言及がない点である。また、同じく征服者で、『メキシコ征服記』(『ヌエバ・エスパーニャ征服の真の歴史』) を残したディアス・デル・カスティーリョは、この件に触れているものの、ロペス・デ・ゴマラに言及する中で聖ヤコブの名を挙げているにすぎず、彼自身はその姿を見なかったとしている[5]。

他方、コルテスによるアステカ征服史に特化していないクロニカの中には、ヌエバ・エスパーニャ征服全般に関して、総論的に聖ヤコブの加護に言及しているものがある。その典型例はイエズス会士アコスタの次の記述である。

「多くの人の報告書と、歴史書にあるように、ヌエバ・エスパーニャでもピル—でも、エスパニャ人の行なったいろいろな戦争で、敵のインディオが、白馬に乗って剣を手にし、エスパニャ人のために戦うひとりの騎士を、空の上に見ていることが確かに知られている。そこで、むかしも今も、新大陸全体で、輝かしい使徒サンティアゴは、ひじょうな尊敬を受けている。」[6]

この引用文には「白馬」に乗った聖ヤコブとあるが、具体的にどの戦場で現

---

4 López de Gómara, Francisco, *Historia de la conquista de México*, ed. de Jorge Gurría Lacroix, Caracas, Biblioteca Ayacucho, 1979, pp. 38-39.

5 ディーアス・デル・カスティーリョ, ベルナール (小林一宏訳)『メキシコ征服記 (一) ～ (三)』岩波書店 (大航海時代叢書エクストラシリーズ、3～5巻)、1986～1987年、第一巻、123頁。

6 アコスタ (増田義郎訳)『新大陸自然文化史 (上)・(下)』岩波書店 (大航海時代叢書第Ⅰ期、3～4巻)、1966年、下巻、455頁。

れた聖ヤコブの話かには触れていない。中世スペインでは伝統的に白馬が聖ヤコブの象徴として用いられてきたことを考えると、個別の戦闘場面に言及せず、アメリカ大陸征服に関わる一般論としてこうした記述が見られるはきわめて自然なことと言えるだろう。

その一方で、伝統的な聖ヤコブのイメージとは異なる要素が史料に登場することもある。先に引用したロペス・デ・ゴマラによれば、聖ヤコブは「灰色で斑のある馬」に乗っていたとされる。征服戦争に参加した兵士としておそらくは唯一の目撃証言者であるベルナルディーノ・バスケス・デ・タピアは「白い馬に乗った者」と述べており、「灰色で斑のある馬」ではない[7]。ディアス・デル・カスティーリョの『メキシコ征服記』には確かに「灰色で斑のある馬」が登場するが、「この戦いの段でフランシスコ・ロペス・デ・ゴマラは、聖ヤコブか聖ペトロのどちらかの使徒が姿を現わしたと書いているが、実際はコルテースが騎馬隊と共にやってくる前に、フランシスコ・デ・モルラが灰色で斑のある馬に乗って一足先に飛び出してきたのである」と書かれている[8]。これに続く段落で、ディアス・デル・カスティージョは次のようにも述べている。

> 「望むべくは歴史家ゴマラが言う通りであって欲しいと思う。しかし、私が彼の書いたものを読むまでは、あの場に居合わせた征服者達の間ではこのようなことはついぞ話題になったことはなかった。」[9]

結局のところ、ロペス・デ・ゴマラの述べている馬の色の情報がどこで得られたものかは不明である。そもそも征服者の証言に「灰色で斑のある馬」という内容があったのか否かすらもわからない。ディアス・デル・カスティージョが『メキシコ征服記』を書き上げたのは、ロペス・デ・ゴマラの作品の出版よりもはるか後のことである。そこでわざわざ「灰色で斑のある馬」を引き合いに出してそれはモルラという人物の馬であったと述べている事実は、むしろロペス・デ・ゴマラの記述を遠回しに否定していると受け止めることすらできる。中世以来の白色とは異なる色をした馬に乗った聖ヤコブ出現というロペス・デ・

---

[7] Vázquez de Tapia, Bernardino, *Relación de méritos y servicios del conquistador Bernardino Vázquez de Tapia*, ed. de Jorge Gurría Lacroix, México, UNAM, 1973, p. 29. なお、バスケス・デ・タピアは聖人名は記していないものの、「その馬は我々が連れてきた馬の中にはいなかった」と述べており、奇跡的に出現した者がいたとする描写を行っている。

[8] ディーアス・デル・カスティーリョ、前掲書、第一巻、122頁。

[9] ディーアス・デル・カスティーリョ、前掲書、第一巻、123頁。

ゴマラの記述は、カルダイヤックが指摘するように、「伝統的スキームが破られた」[10]ことを意味するとしても、そもそも出処不明の情報であることも確認しておく必要があろう。そして、「灰色で斑のある馬」がロペス・デ・ゴマラによる創作であったのか、あるいは別の事情によるのかは、さらに広い文脈での考証を要する。

以上の史料の記述内容の考察からわかるように、聖ヤコブ出現譚にまつわる研究を進めていく上で、クロニカを中心とする聖ヤコブ出現の史料の詳細な検討は今後避けられないテーマである。記述の表面だけを掬いとって議論するのではなく、各々の記述内容の背景まで考慮に入れた分析が今後の必要とされる課題だと言える。

3.3　聖ヤコブの図像

これまでに筆者が収集した聖ヤコブの図像は断片的なものであり、年代についても不明のものがほとんどである。とはいえ、メキシコの聖ヤコブの図像に関する研究はほとんどなされていないことから、まずは2018年8月までに実際に訪れて確認した図像を中心に紹介しつつ、今後の研究で想定しうる問題点を指摘しておきたい。

中世スペインに由来する聖ヤコブのイメージ（写真1）は、スペイン支配の拡大により、メキシコのみならずその海外領の各地に伝えられた。例えば、アステカ征服のおよそ半世紀後に征服されたフィリピンのような遠隔地にも、聖ヤコブのイメージはもたらされた（写真2）。また、征服や植民地支配確立の過程によってサンティアゴと名づけられた町や村は数多い。サンティアゴ・デ・クーバやサンティアゴ・デ・チレのような主要な都市だけでなく、地方の町村名や地区名にもサンティアゴの名称が多く見られる（写真3、写真4）。

[10] Cardaillac, *op. cit.*, p. 130.

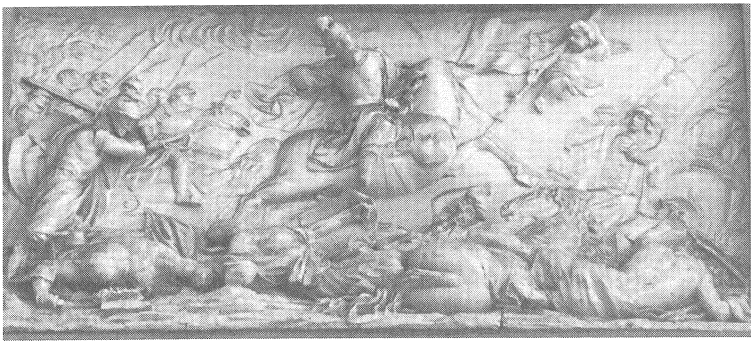
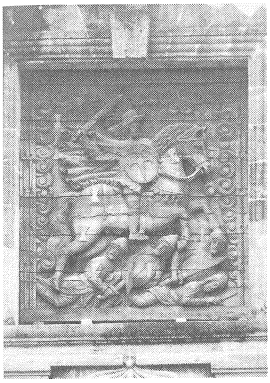
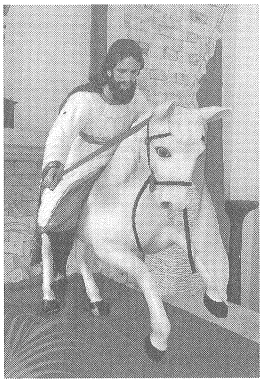


写真１：スペイン、マドリードのサンティアゴ教会のレリーフに刻まれたクラビホの戦い。【出典：筆者撮影（2018年７月）】





左から　写真２：マニラ、サンティアゴ要塞の門の聖ヤコブのレリーフ。
【出典：筆者撮影（2014年８月）】

写真３：セブ島、サンティアゴ・デ・コンポステラ町の教会前の聖ヤコブ像。
【出典：筆者撮影（2017年９月）】

写真４：セブ島、サンティアゴ・デ・コンポステラ町の教会内の聖ヤコブ像。
【出典：筆者撮影（2017年９月）】

表1：メキシコ国内（メキシコ市と31の州）に現存するサンティアゴの地名

アグアスカリエンテス州	2	メキシコ市（旧連邦特別区）	2	モレロス州	3	シナロア州	5
バハ・カリフォルニア州	2	ドゥランゴ州	12	ナヤリー州	6	ソノラ州	5
バハ・カリフォルニア・スル州	2	グアナフアト州	24	ヌエボ・レオン州	4	タバスコ州	3
カンペチェ州	0	ゲレロ州	18	オアハカ州	132	タマウリパス州	9
コアウィラ州	2	イダルゴ州	28	プエブラ州	35	トラスカラ州	8
コリマ州	4	ハリスコ州	13	ケレタロ州	19	ベラクルス州	21
チアパス州	24	メキシコ州	77	キンタナ・ロー州	2	ユカタン州	8
チワワ州	10	ミチョアカン州	18	サン・ルイス・ポトシー州	18	サカテカス州	10

合計　526

出典：Araceli Campos y Louis Cardaillac, *Indios y cristianos. Cómo en México el Santiago español se hizo indio,* México, El Colegio de Jalisco / Universidad Nacional Autónoma de México / Editorial Itaca, 2007, p. 180を元に筆者作成。

カンポスとカルダイヤックの研究によると、メキシコには聖ヤコブの名が冠されたサンティアゴという名の場所（町村や地区）は526か所現存する（表1）。また、サンティアゴという名ではないものの聖ヤコブを守護聖人とする行政区（municipio）は108か所存在し、現在では改名されてしまったものや、現存していないが過去に存在したものを含めるとその数はさらに多く、これら2人の研究者によれば、715か所に上る[11]。

前述の通り、サンティアゴと名付けられた地名は、各時代における「辺境」の場所であった場合が複数見られる。その代表例の一つは、サンティアゴ・デ・ケレタロ（現ケレタロ州ケレタロ行政区内）である。現在、ケレタロ州およびケレタロ行政区の紋章には白馬に跨った聖ヤコブの姿が描かれている（図1、

[11] Campos, Araceli y Louis Cardaillac, *Indios y cristianos. Cómo en México el Santiago español se hizo indio,* México, El Colegio de Jalisco / Universidad Nacional Autónoma de México / Editorial Itaca, 2007, pp. 179-196.

図２)[12]。この紋章のデザインは、植民地時代のケレタロ市の紋章（写真５）を引き継いで現在も用いられているもので、ケレタロ創設に際して聖ヤコブが奇跡を起こしたことに由来する。

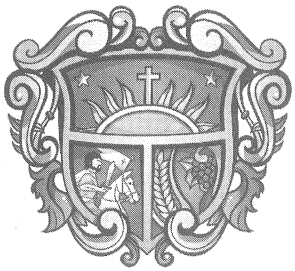
とはいえ、ケレタロ市創設の経緯には不明な点が多い。その時期にも1531年、1537年、1550年などの異説があり、誰が町を創設したかについても議論が残る。創設者については、ノパラの商人であったエルナンド・デ・タピア（受洗前の先住民語名はコンニ）という説と、トゥーラとヒロテペクの支配者家系出身のカシーケ、ニコラス・デ・サン・ルイス・モンタニェスという説がある[13]。奇跡が起きたとされるのは、後者の率いる先住民軍が「野蛮なチチメカ人」と戦った「1522年７月25日日曜日」のことである。この先住民カシーケの報告書の記述に従えば、戦闘中に聖フランシスコおよび聖母マリアとともに聖ヤコブが出現した。また、戦闘後には太陽が止まるという現象が起きたが、「この奇跡は神が使徒聖ヤコブを介してなされたものであった」という[14]。

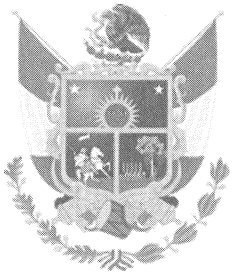
---

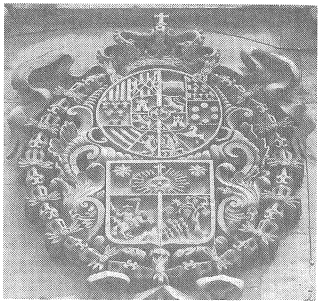
[12] 現在の紋章では馬の色は白であるが、植民地時代のケレタロ市の紋章の馬に色が付けられていたのか、そうだとすれば何色だったのかは今のところ不明である。

[13] García Ugarte, Marta Eugenia, *Querétaro. Historia breve*, México, El Colegio de México / Fondo de Cultura Económica, 2011 (3ª ed.), pp. 53-59. エルナンド・デ・タピア側、ニコラス・デ・サン・ルイス・モンタニェス側の史料はそれぞれ以下で公刊されている。Jiménez Gómez, Juan Ricardo, *Fundación y evangelización del pueblo de indios de Querétaro y sus sujetos, 1531-1585. Testimonios del cacique don Hernando de Tapia y otros indios españoles en el Pleito Grande, entre el Arzobispado de México y el Obispado de Michoacán*, México, Universidad Autónoma de Querétaro / Miguel Ángel Porrúa, 2014; Frías, Valentín F., *La conquista de Querétaro. Obra ilustrada con grabados que contiene lo que hasta hoy se ha escrito sobre tan importante acontecimiento, así como Documentos inéditos de bastante interés para la historia de Querétaro*, Querétaro, Imprenta de la Escuela de Artes de Señor San José, 1906.

[14] Frías, *op. cit.*, pp. 65-67.







左から　図１：ケレタロ行政区の紋章
（出典：ケレタロ行政区HP【http://www.municipiodequeretaro.gob.mx/】）

図２：ケレタロ州の紋章
（出典：ケレタロ州HP【http://www.queretaro.gob.mx/】）

写真５：ケレタロ市内のサンタ・クララ教会のファサードに残る市の紋章。教会自体は17世紀初頭に建てられたものがこの彫刻の作成時期は不明。
【出典：筆者撮影（2016年８月）】

このように、征服・植民地化の前線や拠点として、後に主要な町になった場所にだけでなく、先住民村落（植民地時代の主邑（カベセラ）や属邑（スベート））にもサンティアゴの地名は多く付けられた。こうした地名の多くは、17世紀初頭を中心に実施された集住化（コングレガシオン）政策の結果、聖ヤコブを村の守護聖人とすることとなり、したがって聖ヤコブの教会や礼拝堂が地区や村の中心に置かれたものであると考えられる。

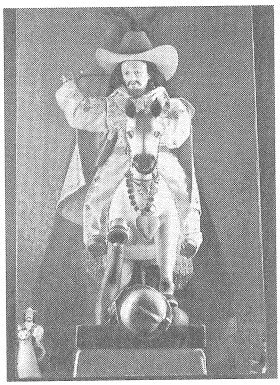
現在、現地に赴くことさえできれば、通常は教会内に安置されている聖ヤコブ像を見つけだすことは容易である。だが、ほとんどの場合、その作成時期は不明である（写真６、写真７、写真８）。村の聖人像は新しく作り直されることもあること、さらには見た目から判断すれば、多くの聖人像が何百年も前のものでないことは容易に想像できる。また、複数回訪れた場所では、聖人の装束が変更され、馬が別の像に置き換えられていたケースもあった[15]。

---

[15] 写真６は2012年９月に撮影したもので、聖ヤコブは紫色の装束に身を包んでいた。約６年後の2018年８月にサンティアゴ・サポティトランを再訪した際には、白の装束に変更されており、2012年にはなかったサンティアゴ騎士団の紋章の入った旗と瓢箪も新たに身につけていた。巡礼者聖ヤコブ像によく見られる瓢箪が付加されたのは興味深い点である。さらには、馬の像が別のものに替わっており、踏みつけられているモーロ人の頭部も別のものに取り替えられているようであった。

これらの像の特徴として、聖ヤコブが跨っているのは白馬であること、またしばしば馬が前足で人間の頭部を踏みつけている（ただし何も踏みつけていないものや人間の頭部だけでなく全身像が表されている場合もある）ことがある。さらに踏みつけられている人間の姿を見ると、髭を生やし旧大陸風の兜を被ったモーロ人らしき者であることが多い（写真９）。つまり、これまでのところ植民地時代の先住民村落だった場所で確認している聖ヤコブ像の多くは「マタモロス（モーロ人殺し）」の聖ヤコブ像である。また、いくつかの博物館等で確認できた植民地時代の聖ヤコブ像もマタモロスの伝統を踏襲したものと考えられるが、聖ヤコブの全身のみならず、馬も金色の場合があった（写真10、写真11）。

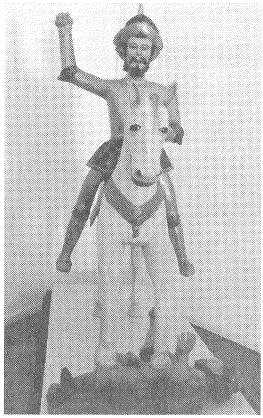
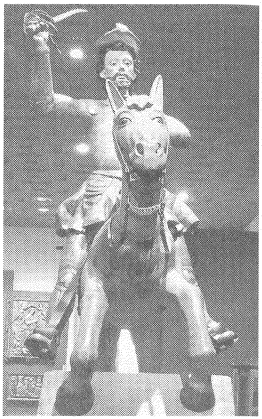
クラビホの戦いに端を発する「マタモロス」の聖ヤコブの伝統の踏襲という点で興味深いのは、先に図１に示したような、向かって右側を向き、馬に乗って剣をもって戦う聖ヤコブのモチーフが頻繁に見られる点である。17～18世紀頃のものと推定される聖水盤や、同じく植民地時代後期に建てられたと考えられる教会のレリーフでは、聖ヤコブは常に向かって右側を向き、右手に持った剣、十字架と旗、踏みつけられている敵（モーロ人）といった要素が適宜取り入れられている（写真12、写真13、写真14）。これらは、伝統的な聖ヤコブの図像を先住民風に解釈したものと考え得る。



左から　**写真６：サンティアゴ・サポティトラン（メキシコ市トラワク区）の聖ヤコブ像。**【出典：筆者撮影（2012年９月）】

写真７：サンティアゴ・テパルカトラルパン（メキシコ市ソチミルコ区）の聖ヤコブ像。【出典：筆者撮影（2018年８月）】

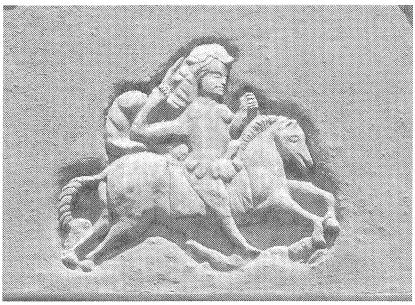
写真８：サンティアゴ・ヨロメカトル（オアハカ州サンティアゴ・ネパヒラ行政区）の聖ヤコブ像。【出典：©Ethelia Ruiz撮影（2012年12月）】

左から　写真９：サンティアゴ・デ・ティラパ（メキシコ州サンティアゴ・ティアンギステンコ行政区）、教会内の礼拝堂の聖ヤコブ像。
【出典：筆者撮影（2018年８月）】

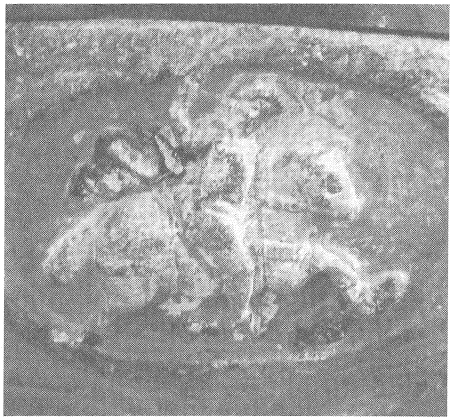
写真10：メキシコ州テポツォトランの副王領期博物館収蔵の聖ヤコブ像（18世紀後半）。聖ヤコブ像のみ金色である。
【出典：筆者撮影（2015年３月）】

写真11：メキシコ市のフランツ・メイヤー美術館収蔵のメキシコ製の聖ヤコブ像（18世紀）。聖ヤコブ、馬ともに金色である。
【出典：筆者撮影（2016年８月）】



左から　写真12：サンティアゴ・テパルカトラルパン（メキシコ市ソチミルコ区）の教会正面上部のレリーフ。【出典：筆者撮影（2018年８月）】

写真13：サンティアゴ・サポティトラン（メキシコ市トラワク区）の教会正面上部のレリーフ。【出典：筆者撮影（2018年８月）】



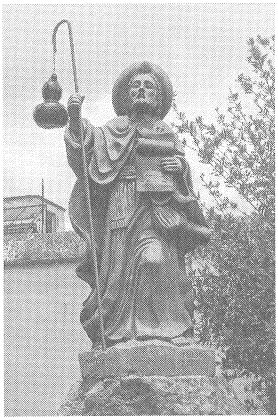
左から　写真14：テナンゴ・デル・アイレ（メキシコ州テナンゴ・デル・アイレ行政区）教会内に置かれた17～18世紀頃の聖水盤のレリーフ。
【出典：筆者撮影（2017年８月）】

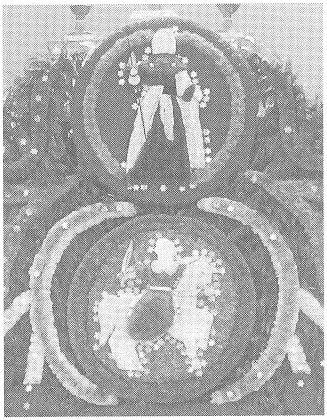
写真15：サンティアゴ・トラテロルコ（メキシコ市クアウテモク区）教会の祭壇のレリーフ。【出典：筆者撮影（2018年８月）】

このように、これまで確認できた範囲では、「マタモロス」の聖ヤコブ像が圧倒的に多く、「マタインディオス（インディオ殺し）」の図像は極端に少ない。サンティアゴ・トラテロルコ教会の木製のレリーフ（写真15）はその数少ないケースの一つであるが、どういう場所や地域で「マタインディオス」のモチーフが多く現れたのかを今後、精査する必要がある。当面、メキシコ内での地域的偏り（スペイン人の居住地やスペイン人の影響の大きい場所だったのか否か、先住民村落にどの程度見られたのかなど）を考慮すべきであろう。また、最終的にはスペイン領の他の地域（特に「マタインディオス」の例が比較的多いと思われるペルー副王領の中心地域）との間でどの程度の差があるのかも比較検討する必要があろう。

最後に、聖ヤコブには、馬に乗って戦うイメージ以外に「巡礼者」としての表象もある。教会の扉や現在の聖人像、近年建立された聖ヤコブ像などに、巡礼者としての聖ヤコブ像を確認することができた（写真16、写真17、写真18）。木製の教会扉の年代は不明であるが、巡礼者聖ヤコブ像には新しいものが多いのではないかというのがこれまでの印象である。世界的なヒトとモノの動きが

加速し、観光も加速する中、スペインのサンティアゴ・デ・コンポステラの外国人巡礼者数を見ると、近年のメキシコは中南米のスペイン語圏諸国で最多の人数である。かつてと異なり、実際に巡礼を行う可能性が広がったり、そうでないにせよインターネットやSNSで現地の様子を簡単に知ることができるようになったことで、巡礼者聖ヤコブのイメージも広がりを見せつつあるのかもしれない。





左から　写真16：サンティアゴ・トゥルイェワルコ（メキシコ市ソチミルコ区）の木製扉の巡礼者聖ヤコブ。【出典：筆者撮影（2018年８月）】

写真17：サンティアゴ・ティアンギステンコの教会敷地内の聖ヤコブ像。台座には2008年７月と刻まれている。【出典：筆者撮影（2018年８月）】

写真18：サンティアゴ・テポプラ（メキシコ州テナンゴ・デル・アイレ行政区）。７月27日の祭礼のために設けられた巨大な花飾りの最上部に、馬に跨った聖ヤコブと巡礼者聖ヤコブのイメージの両方が表現されている。【出典：筆者撮影（2017年８月）】

以上のように、これまでに筆者が確認したところでは、メキシコの聖ヤコブ像に関して、「マタモロス」が圧倒的に多く、「マタインディオス」の普及は限定的であったと思われる。このことは、「マタモロス」なり「マタインディオス」なりの聖ヤコブ像の導入・定着が歴史的にどう進んできたかの解明が十分になされてこなかったことと関係している。「マタモロス」が先住民の間に広まったことは、植民地時代の集住化やキリスト教化の経緯ぬきに明らかにすることは

できないが、この点に関する詳細な研究はまだなされていない。また、頻度がより低いと思われる「マタインディオス」がどういうコンテクストで登場するのかを意識して研究を進めていく必要があると思われる。

3.4 まとめ

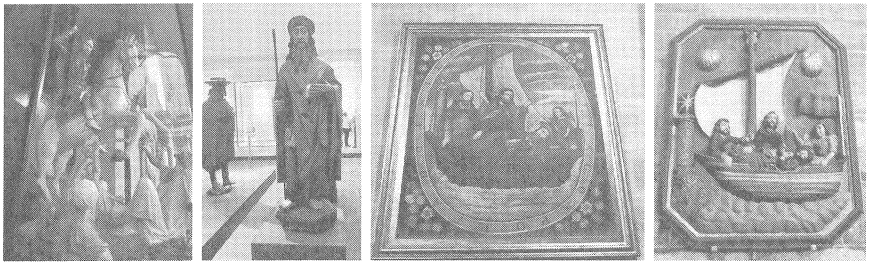
このように、メキシコにおいて聖ヤコブ像がどのように伝えられ、普及し、定着したのかは、研究の蓄積がほとんどなく未解明の部分があまりにも多いテーマである。歴史文書の場合も図像の場合も、特定の記述や表象があるかないかの断片的情報を探し出して一喜一憂するのではなく、それらが残された状況を歴史的コンテクストから切り離さずに地道に考察していくことが必要とされるだろう。そうすることで、聖ヤコブ像やその信仰がメキシコで定着していった歴史的過程とその実態が少しずつ解明されることになるのではないだろうか。

4．ペルーとチリにおけるサンティアゴ図像の変容

大原志麻

4．1．はじめに

聖ヤコブ、すなわちサンティアゴの遺骸が820年から830年の間に発見[1]されたことに始まるサンティアゴ信仰の歴史は、凡そ1200年の長きに渡る。サンティアゴの表象は様々な変遷を重ねてきたが、現在のサンティアゴ・デ・コンポステラとその周辺で最も見かけるサンティアゴの図像は、巡礼者像が最も多く、マタモロス（イスラーム教徒殺し）像及びイスパニアへの布教を中心にサンティアゴの生涯を描く三類型が主にみられる。



左から　図１　パドロンのサンティアゴ・マタモロス　　図２　巡礼者のサンティアゴ
図３，４　サンティアゴの移送[2]

中世スペインに始まるサンティアゴ図像の変遷を時系列でみていくと、12世紀のレオン王国において、対イスラーム戦争のなかで形成されたとされるマタモロス像がみられる。13世紀には王権との密接な関係から共有されたイコノグラフィーである座位で冠を推戴しているサンティアゴの図像が制作されている。そして14、５世紀になり、経済と政治の中心が南下し、辺境となったサンティアゴ・デ・コンポステラと王権との関係が失われ、サンティアゴ・デ・コンポステラの巡礼路が巡礼者によって支えられる中、巡礼者姿のサンティアゴとい

1　Yzquierdo Peiró, R., *Las colecciones de arte de la catedral de Santiago, estudio museológico*, tesis doctoral, Universidade de Santiago de Compostela, 2015, p. 101.

2　図１～３はパドロンのサンティアゴ教会にて、図４はコンポステラの巡礼センターにて2016年に筆者撮影。

う図像が確立していった。

本稿では、まず、中世レオン王国及びカスティーリャ王国の時代において制作されたサンティアゴ図像が、どのような政治的状況と連関して形成されたのかを概観する。そしてカスティーリャ・レオン王国で形成されたサンティアゴの図像が、16、7世紀段階でイスパノアメリカ世界にどのように受容されたかについて統合的に整理していく。

4.2. レオン王国及びカスティーリャ王国期におけるサンティアゴ図像

サンティアゴの図像のうち、最も早くから見られるマタモロス像は、レコンキスタと呼ばれる対イスラーム戦争とともに形成されたとされている。レコンキスタを推進するためにサンティアゴ騎士団が創設されたが、まずはその関連文書の中にサンティアゴ・マタモロス図像を見出すことができる。

サンティアゴ騎士団とサンティアゴ・デ・コンポステラ大司教との関係は、1171年2月にサンティアゴ・デ・コンポステラ教会が、その名前を騎士団に用いることを認め、サンティアゴの旗を掲げた軍事的奉仕の対価として、地代収入を得るという協定が結ばれることに始まる。しかし、早くも1175年までにはコンポステラ教会と遠いカセレスを本拠とするサンティアゴ騎士団との関係は希薄なものとなり、13世紀以降にはサンティアゴ騎士団は、カスティーリャを中心に活動するサンティアゴ教会とは別個の組織となる[3]。しかし、12世紀前半の段階では、サンティアゴ騎士団関連文書において、図5の騎士聖人としてのサンティアゴ、そして図6のようにマタモロスの図像が確認することができる。

[3] Ayala Martínez, C., *Las órdenes militares hispánicas en la Edad Media (siglos XII-XV)*, Madrid, Marcial Pons, 2003, p. 120.

左から　図５　1174年サンティアゴ騎士団へのウクレスの寄進文書[4]
図６　12世紀前半のサンティアゴ騎士団規則集[5]

13世紀以降には、1240年頃制作されたクラビホのタンパンのようなキリストの騎士のイコノグラフィーに加え、栄光の門の中方立とコンポステラ大聖堂の祭壇にある非常に特殊なイコノグラフィーである「座位のサンティアゴ」が見られる。1230年にレオン王国がカスティーリャ王国に再統一され、その影響力が失われるに従って無くなる珍しい図像であるが、13世紀中頃のサンティアゴ像は、レオン王権と共有する権威の象徴である杖を持っている。冠については、1240年から1250年に言及されているサンティアゴが被っていた王冠を表しており、頭部は同時代の王である『トゥンボA』のフェルナンド３世ともしくはアルフォンソ10世像と同じアトリビュートでもあることから[6]、この時点での王権とサンティアゴ図像との密接な関係を窺い知ることができる。

図７　王冠を被る座位のサンティアゴ（1250年頃）[7]

図８　キリストの騎士像（1326年頃）[8]

[4] Ayala Martínez, C., *op.cit*, p. 123より転載。
[5] Ayala Martínez, C., *op.cit*, p. 127より転載。
[6] Yzquierdo Peiró, R., *Museo catedral de Santiago*, Santiago de Compostela, 2011, pp. 96.
[7] Yzquierdo Peiró, R., *Ibid*, p. 97より転載。
[8] Yzquierdo Peiró, R., *Las colecciones de arte de la catedral de Santiago, estudio museológico*, tesis

なお同時代の他のサンティアゴの像には馬用のまぐさや背負い革が使われているものは見られるが、巡礼用の長い杖はまだ用いられていない。

14世紀に入ると、『トゥンボB』f2v.ように座位のサンティアゴと図8の「キリストの騎士miles Christi」のサンティアゴの図像も見られるが[9]、巡礼者姿のサンティアゴが主流となってくる。これはフェルナンド4世以降王権からの寄進が激減し、サンティアゴ巡礼がサンティアゴ教会によって独自に管理され、また外国人巡礼者によって支援されていたという時期的特徴によるものである。図9のサンティアゴは銀製金箔で台座が設えてあり、右手にはフランスからサンティアゴ巡礼を行った、寄付者であるフランス王フィリップ5世の財務官でパリのブルジョワジーであるジョフロワ・コカトリクスの名前を記したプレートを、左手には長い杖、頭には帽子を被り、長いチュニカを身に纏い、裸足である[10]。これらには、使徒サンティアゴのイコノグラフィーが看取される。また長い杖、貝、つばの狭い帽子は14世紀に導入され始め定義される巡礼者サンティアゴのイコノグラフィーであり、この像は使徒サンティアゴと巡礼者としてのサンティアゴが融合したものとなっている。

左から　図9　巡礼者サンティアゴの聖遺物箱（1321年）[11]
図10 巡礼者サンティアゴ（15世紀）[12]　図11 巡礼者サンティアゴ（1445年頃）[13]

---

doctoral, Universidade de Santiago de Compostela, 2015, p. 116より転載。

9 Yzquierdo Peiró, R., *Ibid*, p. 116.

10 Yzquierdo Peiró, R., *Museo catedral de Santiago*, Santiago de Compostela, 2011, p. 130.

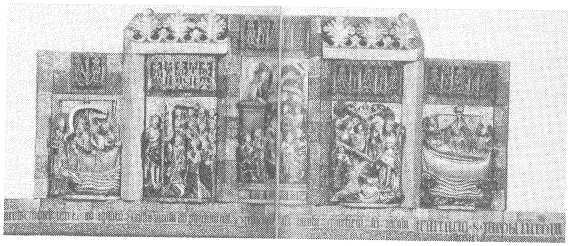
11 Yzquierdo Peiró, R., *Ibid*, p. 131より転載。

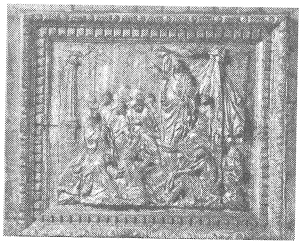
12 Yzquierdo Peiró, R., *Ibid*, p. 133より転載。

13 Yzquierdo Peiró, R., *Ibid*, p. 135より転載。

図10のサンティアゴは、ヨハンネス・ドゥ・ルーセルとその妻の名が付された、図９の聖遺物箱と類似しているが、一世紀後の作品であり、パリの14、５世紀の金細工師によって制作されたものである[14]。コカトリクスのものとは異なり、使徒サンティアゴの属性が取り除かれ、巡礼のための瓢箪のついた長い杖、革袋に帽子のホタテ貝と服装など、当時の巡礼者の姿に忠実な、コンポステラ巡礼の守護者としてサンティアゴの像が制作されている。

図11の巡礼者のサンティアゴは、宝冠を戴き、右手に瓢箪のついた長い巡礼用の杖を持ち、左手に本を持ちその飾り座金には、依頼主のコンポステラのアルバロ・デ・イソルナ大司教の紋章が付されている。またＦとＭのイニシャルが刻まれていることから、作者がイタリア人金銀細工師のフランチェスコ・マリノであることがわかる。この巡礼者のサンティアゴ像がサンティアゴ・デ・コンポステラに到着したのは次のロペ・デ・メンドーサ大司教の時代であるが[15]、巡礼用の長い杖に瓢箪がかけられ、巡礼用の短いマントがチュニカの上に配される図式が14、５世紀に確立し、マタモロス像に代わって主流となっていく。





左から　図12サンティアゴの生涯を描いた衝立（1456年頃）[16]
図13 サンティアゴの説教（1594－96年）[17]

[14] Yzquierdo Peiró, R., *Ibid*, p. 132.
[15] Yzquierdo Peiró, R., *Ibid*, p. 134.
[16] Yzquierdo Peiró, R., *Ibid.*, pp. 94-95.
[17] Yzquierdo Peiró, R., *Ibid.*, p. 87.

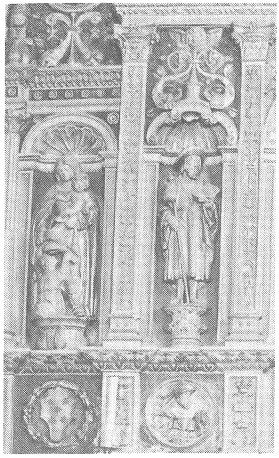


図14 サンティアゴ・デ・コンポステラ大聖堂の巡礼者姿のサンティアゴ（1520年頃）[18]

レコンキスタがほとんど進展せず、またヤコブス・デ・ヴォラギネの『黄金伝説』が広く読まれた15世紀の図像として顕著なのは、図13のようにイベリア半島への布教を行ったカトリックの偉大なる伝道者としての使徒大ヤコブのイコノグラフィーである。図12は、1456年の聖年の巡礼に際して奉納するためジョン・グッドイヤーによってノッティンガムの工房に依頼されたもので、『トゥンボF』に登録されている。5枚のアラバスターのパネルで構成されており[19]、対照的なレリーフで、左から右へと年代順に召命、布教、説教、殉教、移葬といった使徒大ヤコブの生涯の出来事を綴るものである。16世紀前半にアロンソ・デ・フォンセカ3世サンティアゴ・デ・コンポステラ大司教により制作された、図14のサンティアゴ大聖堂の救世主の祭壇における使徒と巡礼者が合わせられたサンティアゴ像はこの類型を代表するものといえよう。

このように、征服戦争前夜のイベリア半島において、マタモロス像は巡礼者そして十二使徒の一人としてのサンティアゴ像に転じていき、それらが主流となっていたことが窺い知ることができる。

---

[18] Yzquierdo Peiró, R., *Las colecciones de arte de la catedral de Santiago, estudio museológico*, tesis doctoral, Universidade de Santiago de Compostela, 2015, p. 110.

[19] Yzquierdo Peiró, R., *Museo catedral de Santiago*, Santiago de Compostela, 2011, p. 94.

4.3. ペルーにおけるサンティアゴに関する叙述と図像

中世から近世にかけてカスティーリャ王国で形成されたサンティアゴ図像は、どのようにラテンアメリカで受容され、またアダプテーションされたのだろうか。サンティアゴの図像は、異教徒との戦いにおいてキリスト教徒に加護を与える騎士聖人として、16世紀に始まる征服戦争についてのクロニカで言及されている。

フランシスコ・ロペス・デ・ゴマラの1552年の『メキシコ征服記』の記述によると、セントラで顕現したサンティアゴは、「(前述の通り) 全ての人々は灰色の馬が我々に味方しインディオと戦うために急降下したと言っていた。それは我々の国家聖人であるサンティアゴだった」[20]とある。サンティアゴは、天から灰色の馬に乗って急降下してきたとされており、まだ後に顕著となる白馬とはされていない。これについて1568年の『メキシコ征服記』においてベルナル・ディアス・デル・カスティジョはゴマラの記述を否定する文脈において「ゴマラが言うには栄光ある使徒サンティアゴかセニョール・サン・ペドロであったようだが、私は罪深いため使徒を見るに相応しくなかった。私が当時見て知っているのは、フランシスコ・デ・モルラが栗毛の馬に乗ってコルテスと一緒にやって来たことである」[21]と記しているが、ディアス・デル・カスティジョは、マルティン・コルテスと係争中であり、エルナン・コルテスへのサンティアゴの加護を否定する目的で、灰色の馬を実際に目撃した栗毛の馬だったとし、聖性を否定している。アントニオ・ソリスによる、1684年の『メキシコ征服記』においては、「白馬に乗ったサンティアゴがスペイン人のために戦ったとこれまで記述されてきた」と述べられており[22]、この時点で、馬が灰色から白馬へと変容している。

ペルーでのサンティアゴの顕現に関する記述の起点となっているのは、1553年にセビーリャで公刊されたシエサ・デ・レオンの『ペルー記』であろう。1548年9月17日にゴンサロ・ピサロの反乱を撃破し、リマに凱旋した異端審問所審

---

[20] López de Gómara, F., *La conquista de México, Barelona,* 2010, p. 55.　下線は引用者による。

[21] Díaz del Castillo, B., *Historia Verdadera de la Conquista de la Nueva España,* Madrid, 1989, p. 84. 下線は引用者による。

[22] Antonio de Solís, *Historia de la conquista de Méjico,* cap.I, http://www.cervantesvirtual.com/obra-visor/historia-de-la-conquista-de-mexico--0/html/ca0b23e8-c501-4135-9161-df6c5d50733c_2.html#I_2_ (最終閲覧日2019年2月11日。下線は引用者による。) "Algunos escriben que anduvo en esta batalla el apóstol Santiago peleando en un caballo blanco".

議官ラ・ガスカは、『ペルー記』を完成させるため、シエサを「インディアスの記録者」に任命した。シエサはゴンサロ・ピサロの書簡、ラ・ガスカの手記をはじめ、多くの貴重な文書の閲読を許された。またクスコ、チャルカス地方に調査旅行に出発したときにも、必要な情報を提供するようにとの地方官憲へのガスカの訓令が発せられたこともあり、多くのインフォーマント、特にクスコの旧インカ支配層の人々の口述資料を得るなど調査旅行において大きな成果を上げ、内乱史の豊富な資料、書き溜めていた手記などを加えて『ペルー期』を書き上げた[23]。「クスコで、インディオたちがキリスト教徒たちに対して蜂起したとき、歩兵と騎兵を合わせてエスパニャ人は180人しかいなかった。それに対してマンゴ・インカは、20万以上のインディオの戦士を率いていた。そして丸一年間、エスパニャ人たちがインディオの手を逃れることができたのは、大きな奇跡である。というのは、数人のインディオたちの証言によれば、エスパニャ人と戦っていたとき、何度か彼らのかたわら天の人があらわれ、彼らに大きな被害を与えたそうである。」[24]という『ペルー記』第一部の記述には、天から降りてくる人物像が言及されているが、まだサンティアゴと直接関連付けられてはいない。ドミンゲス・ガルシアは、この記述がサンティアゴ以上に言及されている聖母マリアの白い衣服や目を眩ます光などと混淆して、雷をアトリビュートとする以後のサンティアゴの図像へと変容していったとしている[25]。

その後1590年頃ホセ・デ・アコスタは『新大陸自然文化史』において、「敵のインディオが、白馬に乗って剣を手にし、エスパニャ人のために戦う一人の騎士を、空の上に見ている」[26]と、ここでは灰色の馬ではなく、「白馬」に乗って「天にいる」「剣を手にした騎士」となっており、16世紀末におけるサンティアゴ図像の祖型をみることができる。

雷とサンティアゴの関連については、1609年にリスボンで公刊されたインカ・ガルシラソ・デ・ラ・ベガの『インカ皇統記』[27]に、マンコ・カパックの蜂起の最中に1537年にクスコの広場で1000人のインディオに対し一人のスペイン人しかいなかった戦いに顕現したサンティアゴの奇跡についての叙述がある。「大きな声で聖母マリアの名とスペインの守護聖人であるサンティアゴの名を呼びな

---

[23] シエサ・デ・レオン（増田義郎訳）『インカ帝国史』岩波文庫、2006年、405－406頁。
[24] シエサ・デ・レオン（増田義郎訳）『インカ帝国地誌』岩波文庫、2007年、592頁。
[25] Domínguez García, J., *De Apóstol Matamoros y Yllapa Mataindios*, Salamanca, 2008, p. 112.
[26] 齋藤晃『魂の征服　アンデスにおける改宗の政治学』平凡社、1993年、166頁に引用。
[27] Garcilazo de la Vega, I., *Historia General del Perú. La Segunda parte de los Comentarios Reales*, I, 1962, p. 269.

がら、インディオに襲い掛かった。そこにスペイン人とインディオの目の前にサンティアゴが美しい白馬に乗り、騎士団の記章が付いた盾を持ち、右手には雷と見まごう強い光を自ら放つ剣を手にもってはっきりと現れた」[28]、「あの雷を手に持つビラコチャ[29]は誰か？［…］聖人が攻撃したい場所で、驚嘆すべき奇跡から異教徒が逃げ惑い、的外れなことをし、お互いを抑え込み、逃げようとしていた。インディオがキリスト教徒に攻撃をしかけたのは、聖人が赴く間もない程速かったが、奇跡は素早く起こり、インディオはサンティアゴから逃げ惑い、それによりスペイン人たちは勇気づけられ、再び戦闘を開始し、防ぎきれなかった数多くの敵を殺した。インディオはこれ以上戦うことが出来ず逃げることに決めた」[30]とある。

ガルシラソの記述は、アルフォンソ10世の『スペイン第一年代記』における、「神と白馬に乗り輝く剣を手にしたサンティアゴ」が「赤い十字が見える白い旗を片手に、もう一方の手には剣を手にして天から降下してきた」とするクラビホの戦いへの言及[31]との共通性が見られる。この時期のスペインには偉大なるスペインの起源を探るために、過去の記述を想起する叙述が多い。この時代『スペイン第一年代記』も頻繁に引用されていたため[32]、ガルシラソが例え『スペイン第一年代記』を直接読んだことがなかったにせよ、サンティアゴについての図像的な記述について知悉していたことは確かであろう。『インカ皇統記』の編者であるメルセデス・セルナは、これは「人文主義者の古代に対する姿勢の特徴」でもあり[33]、現実の目撃情報は副次的なものに過ぎない[34]としているが、これはワマン・ポマの姿勢にも共通する。このようにして17世紀という時代性を背景とした中世スペインの叙述の傾向が、イスパノアメリカに輸入されていったと考えられる。

1613年頃に書かれたワマン・ポマによる『新しい記録と良き統治』に記され

---

[28] Garcilaso de la Vega, *Comentarios reales de los incas*(ed. Serna, M.), Madrid, 2000, p. 186.

[29] ビラコチャは、インカの王位継承者たるある王子の前に表れて自分は太陽の子であると告げたといわれる幽霊のことを指すが、インディオはスペイン人のことを神と称えビラコチャと呼ぶようになり、現在ではヨーロッパの紳士を意味する。

[30] Millones, L., Mayer, R., *Santiago Apóstol. Combate a los moros en el Perú*, Barcelona, 2017, p. 39.

[31] Alfonso X el Sabio, *Primera crónica general de España*(ed. Menéndez Pidal, R.), Madrid, 1977, p. 360.

[32] 大原志麻「ヌマンシアのアダプテーション―ローマ帝国からセルバンテス、そしてナショナリズムへ」『アダプテーションの倫理』春風社、2019年、234－264頁に詳述。

[33] Domínguez García, J., *op.cit.*, p. 109.

[34] Domínguez García, J., *op.cit.*, p. 110.

ているペルーのサンティアゴについては、既に別稿[35]で扱ったが、そこでのサンティアゴは「キリストの使徒であるガリシアの大ヤコブ」であり、大ヤコブはコルテスの『報告書簡』と同様に「セニョール・サンティアゴ」と称され、同じく天から急降下するものの、「天から稲妻」とともに降下し、「白馬に跨り」「旗を持ち」「色鮮やかなマント」を纏い、「抜き身の剣」で「完全武装」しており、インディオは「サンティアゴを雷と呼ぶようになった」と描かれている。白馬に乗り、剣を持っていることに加え、雷とともに急降下し、巡礼用のチュニックは色鮮やかなマントに、そしてつばの狭い帽子はガウチョ風の帽子へと変わっている。また挿絵のサンティアゴは武装し、鉄帽を被り、馬に乗るスペイン人である。

1631年にバルセロナで刊行された『ペルーにおける聖アウグスチノ修道会の教化年代記』においてアントニオ・デ・ラ・カランチャは同様に「スペイン人が既に全滅しそうな時に、サンティアゴが白馬に乗り、盾を持ち、幾千ものインディオの命を奪う剣を持って現れた。インディオたちは「手に携えているあの雷で我々全てを殺すビラコチャは何だ」と口にし[36]、「発砲する際にスペイン人たちがサンティアゴと言っていたので、サンティアゴと呼ぶようになった」[37]としており、共通した特徴として捕捉することができる。

サンティアゴの雷のアトリビュートは、「ゼベダイの子ヤコブとヤコブの兄弟ヨハネにボアネルゲ、すなわち雷の子という名が与えられた」[38]という使徒大ヤコブの激高する性質を指してのあだ名とインカの雷神イリャパ[39]との習合によるものだと考えられている。

サンティアゴは、前述した1536年にマンコ・インカと原住民の抵抗に対する戦いでスペイン人を庇護するため天から降りてきた奇跡を理由として、1651年にクスコ市の守護聖人にとなった[40]。クスコ大聖堂内のサンティアゴの副祭壇に設えてあるサンティアゴ像[41]については既に別稿に写真を載せているが、図

---

[35] 大原志麻「アンデスにおけるサンティアゴ信仰の変容の一側面」『翻訳の文化／文化の翻訳』12号、61－70頁。

[36] Antonio de la Calancha(ed. Prado Pastor, I.), *Crónica moralizada*, Tomo I, Lima, 1974, p. 254.

[37] Antonio de la Calancha(ed. Prado Pastor, I.), *op.cit.*, pp. 839-840.

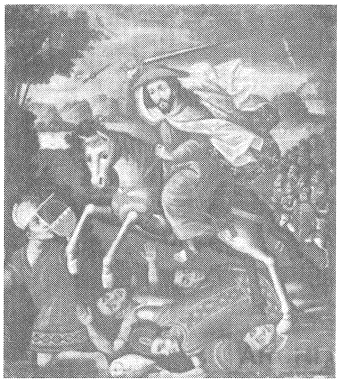
[38] 「マルコによる福音書」『新約聖書』中央出版社、1988年、124頁。

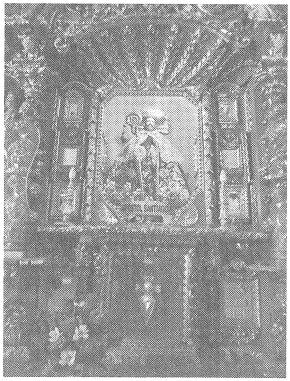
[39] 名詞illapaは「稲妻」「雷鳴」「雷撃」の三つを一つにして呼ばれていた。動詞illapantacは、「雷鳴がとどろく、稲妻が走る、雷が落ちる」の三つの動詞の意味を包含している。

[40] Chacón Rosasco, C., *La catedral del Cusco y la iglesia de la compañía de Jesús*, Cusco, 2015,, Cusco, 2015, p. 17.

[41] 大原志麻、前掲論文、63頁。

15のサンティアゴはこれまでの記述が反映されたマタインディオス（インディオ殺し）であり[42]、ワマン・ポマの記述と同様いずれも「白馬に跨り」「帽子を被り」「抜き身の剣を振りかざし」「マントを羽織って」いる。





左から　図15 クスコ大聖堂内のサンティアゴ・マタインディオス
図16 リマの大聖堂内の使徒サンティアゴ[43]

ペルーで受容されたサンティアゴは、マタモロスを原型としたサンティアゴで、勝利に導く騎士の図像である。白馬に跨り、マントを風に靡かせ、剣を振り上げそして敗者に振り下ろす図像は、インディオたちに制作されるようになり、それぞれの地域における多様性がありながらも、共通の規定的要素としてみることができる。

4.4. サンティアゴ・デ・チレにおけるサンティアゴの図像

ペルーの南に位置する現在のチリとサンティアゴの関係は、1540年からペドロ・デ・バルディビアが征服事業に乗り出し、1541年2月24日、神と聖母マリア、それにスペインの征服戦争の守護神である使徒サンティアゴに祈りを捧げたあと、建設を開始した新しい町をサンティアゴ・デル・ヌエボ・エストレモと名付けたことに始まる[44]。1556年からはサンティアゴ市で、その守護聖人聖

[42] 筆者が取材した範囲では撮影禁止のところが多かったが、ペルーではサンティアゴ・マタインディオス像が非常に多かった。
[43] 図15，16は2016年に筆者撮影。
[44] De Oballe, A., *Historia Relación del Reino de Chile*, Libro V, cap.II, Santiago de Chile, 1888.

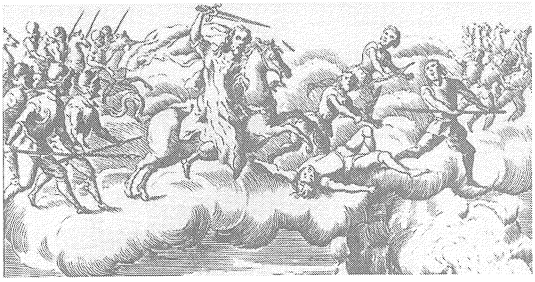
ヤコブの日の前日にスペイン国王の軍旗を掲げて行進する晴れがましい特別行事が行われるようになった[45]。また1555年に聖フアンの日や聖ヤコブの日、聖母被昇天の日には闘牛を催すことが習慣となっている[46]。

チリにおけるサンティアゴの奇跡に関しては、ラ・セレナでの記録がある。1541年9月11日未明に、アコンカグア（チリの谷）一帯の大酋長ミチマロンゴが率いる大勢のインディオが、建設されたばかりのサンティアゴ市を破壊し、住民を皆殺しにしようとした事件があった。この時バルディビアはカチャポアル地方のインディオ討伐に出かけ、街には100人のスペイン人しか居合わせなかった状況にあり、戦闘は何時間にも及び、スペイン人たちは敵の攻撃を防ぐだけでなく、土壁と藁の粗末な建造物に火矢をしかけられたため、消火にも追われた。スペイン人の生存者も少なくなり、しかもその大部分が負傷しており、中央広場まで退却したが、日暮れ時になって、イネス・スアレスは敵に恐怖心を植えつけるため、人質にとっていた7人の酋長の首を斬ることを提案し、刀を取って捕虜たちの首を斬り落としはじめた。そして生首を敵軍の中に投げ込むと、敵軍はおののいて逃走しはじめ、敵の足並みが乱れた瞬間、スペイン軍はインディオ軍に撃ってかかり、インディオ軍は浮足立って敗退した[47]。この大酋長ミチマロンゴを制圧した戦闘の際に、サンティアゴが顕現したとされている。

この事件に関してイエズス会士アロンソ・デ・オバジェの『チリ王国の歴史物語』には以下の記述がある。「ミチマロンゴ酋長は皆が活力を得ようと少し飲んでいる際に、サンティアゴ市にいるスペイン人が戦死者により32の騎兵と18名の歩兵より下回っているかどうかを知るため、何人かで偵察に行き数えてくるよう命じた。偵察に行ったものは一人一人のスペイン人を何度も数え、33名の騎兵であることを確かめた。この報告を携えてミチマロンゴ将軍の下に赴いたが、彼は彼らが酔っ払っていたに違いないと嘲笑い、彼は騎兵が32以上いるかどうかを知ろうとしたのではなく、それ以下であることで、それ以上に確かなことはなく、誰にも疑いの余地がないように確かめるためであったからである。再び別の者を偵察に派遣し、最初に派遣した者たちと同じ報告をすると、他の多くの原住民たちも皆、騎兵が33であったということで一致し、それはフランシスコ・デ・ビジャグランも戦闘時に気づいたことであるが、あの場に32

[45] De Oballe, A., *op.cit.*, cap.VIII.
[46] ハイメ・エイザギレ（山本雅俊訳）『チリの歴史』新評論、1998年、219頁。
[47] ハイメ・エイザギレ（山本雅俊訳）、前掲書、114頁。

の騎兵以外いたあの騎士は栄光ある使徒サンティアゴであり、神の摂理により神の御名で村を救い、この聖人の名を祈願したのである」[48]。



左から　図17 サンティアゴ市を守る使徒サンティアゴ（1646年）
図18 ラ・セレナのサント・ドミンゴ教会のサンティアゴ・マタモロス（18世紀）[49]

この『チリ王国の歴史物語』付された図17のサンティアゴは、抜き身の剣を振りかざし、白馬に乗り、マントを羽織っている。図18のラ・セレナのサンティアゴは抜き身の剣を手にし、マントを翻し、白馬に乗っているマタモロスであり、サンティアゴ騎士団の旗と帽子が付け加えられており、ガルシラソ・デ・ラ・ベガの叙述との共通性が見て取れる。

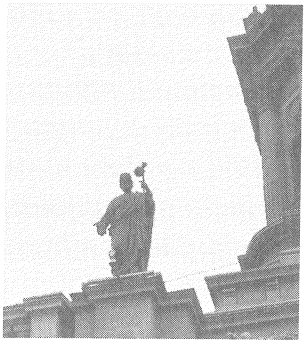
今日のその名を冠したサンティアゴ市のサンティアゴの図像であるが、サンティアゴ大聖堂には、図20の1888年に制作された祭壇が、入り口から向かって左手の目立たないところに設置されているのみであった。説明には「大ヤコブはガリレアの漁師で主の主要な弟子であり、キリストの磔刑の後布教に努め、殉教した」とあり、使徒サンティアゴ像が強調されている。図19のカテドラル上部のサンティアゴは瓢箪を持った巡礼者のサンティアゴのイコノグラフィーとなっており、マタモロスの表象はサンティアゴ市及びパタゴニアやラパヌイでは見られなかった。現在のサンティアゴ市では、先住民の少なさからボリビ

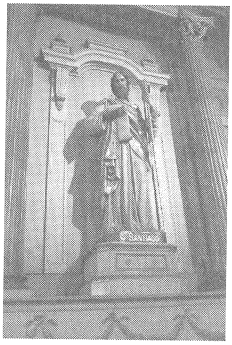
---

[48] https://es.wikipedia.org/wiki/Pedro_de_Valdivia　（最終閲覧日2019年２月11日）

[49] Guarda, G., *La Edad Media en Chile. Historia de la iglesia desde la fundación de Santiago a la incorporación de Chiloé 1541-1826*, Santiago, 2016, p. 16.

アのように習合してTata Santiagoになることも[50]、マタインディオスとして図像が確立することもなく、近代にスペインから直接図像を取り入れるかたちでマタモロス像、そして巡礼者や使徒サンティアゴ像となっている。アルマス広場には小さく目立たないところに2004年に設置された図21のサンティアゴ像があるが、こちらも巡礼者姿のサンティアゴとなっている。





左から　図19 サンティアゴ大聖堂のサンティアゴ
図20 サンティアゴ大聖堂の守護聖人使徒サンティアゴの祭壇
図21 アルマス広場のサンティアゴ像[51]

4.5. おわりに

スペインでは、初期中世からサンティアゴが様々な図像で表現されてきた。レコンキスタとの結びつきから、12世紀にはマタモロス像が、13世紀にはレオン王権との結びつきから王冠を戴き王笏を持つ座位のサンティアゴが、そして14世紀から巡礼者像が多くみられるようになり、近世にかけては使徒サンティアゴ（大ヤコブ）が主流のモチーフとなった。しかし近世にスペインからイスパノアメリカに伝わったサンティアゴはマタモロス像である。その背景については、しばしばレコンキスタが1492年に終わったばかりであり、その延長線上に征服戦争があったためと考えられているが、実際にはこの時代のスペインではマタモロス像は減少していた。イスパノアメリカのサンティアゴの図像は、

[50] 大原志麻、前掲論文。
[51] 図19～21は2018年に筆者撮影。

白馬に乗り、マントを羽織り、輝く抜き身の剣を振り上げているが、この図像の元テクストはクロニスタたちによる記録である。それはコンキスタドーレスの書簡や記録や旧インカの人々による口述資料を元にしつつ、17世紀スペインの人文主義者の姿勢からの影響を大きく受けて再構築されていったもので、征服戦争という対異教徒戦争と布教という条件下において、マタモロスはマタインディオスとなっていった。サンティアゴは、先住民文化が色濃く残るペルーにおいて、発砲を雷鳴の轟、そして光り輝く剣を雷にみたててイリャパやビラコチャと習合し汎神教を包含して信仰され、サンティアゴを守護聖人とする都市や村落を中心にサンティアゴの図像が作成された。クロニスタの記録の間とそれをもとに作られるサンティアゴ図像にはラテンアメリカの広い領域で共有され同一性が見られるが、先住民人口の少ないチリでは、クロニスタの記述に従ったサンティアゴ像がみられるものの、習合したサンティアゴ信仰は見られず、直接近現代のスペインからサンティアゴの図像が取り入れられ、巡礼像もしくは十二使徒のサンティアゴ図像が主となっている。

＊本稿は、2018年度科学研究費補助金（基盤研究(C)：課題番号17K02037）の成果の一部である。